

# Nara Women's University

## V 研究発表

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属幼稚園 公開日: 2010-11-18 キーワード (Ja): 個人の成長を追って, 調整力を高める運動遊びの指導, 発達, 幼児 キーワード (En): 作成者: 大橋,和子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/2508">http://hdl.handle.net/10935/2508</a>

## V 研究発表

### 1. 研究の経過

大橋 和子

#### (1) 研究の動機

##### 1) 幼児の発達の特徴から

幼児期の運動発達は、エネルギー系（筋力・舜発力・持久力など）の発達よりは、神経系の発達の著しい時期であるといわれる。

神経系の発達、とくに調整力（敏捷性・平衡性・協応性・柔軟性）の発達は、3歳児から小学校高学年にかけてよく発達するといわれ、この時期に十分その発達を促がすことができれば成人してからも、その能力を維持・活用することができる。

したがって調整力を高める運動遊びの指導法を研究する必要があるだろう。

##### 2) 環境の影響から

近年の都市化現象・産業中心の道路政策やモータリゼーション等の影響をうけて、子どもたちの周辺から急速に遊び場が奪われ、子どもたちの発達に必要な運動要求を満たす場が失われた。

また、核家族化や家族計画、地域共同体の解体などの影響により、近隣の遊び友だちが少なくなり、遊び集団の人間関係構造も変質した。

このような理由から、幼児教育機関において、幼児の成長・発達に不可欠な調整力を高める運動遊びの機会をつくり、友だち集団を構成して、幼児の健全な心身の発達をはかる必要があると考える。

#### (2) 研究の目的

##### 1) 調整力を高める運動遊びを通しての人間形成

① さまざまな運動遊びを経験させて、全身を思いのままにコントロールできるようにする。

② 友だちとともに思いきり遊ぶことができるようにするとともに、自己表現を活発にする。

ことによって、健康な身体をつくり、情緒の安定をはかり、社会性の発達をはかるとともに、思考し、創造することのできる豊かな人間性を育てる教育を志向する。

##### 2) 幼年期の一貫教育をめざす運動遊びの年間指導計画の作成

① 3・4・5歳の発達にふさわしい運動に、子どもが興味をもって遊びこむうちに、自然に調整力を高めることができるような運動遊びを工夫する。

② 遊び方や必要な技能を身につけて、子ども自身が努力のめあてをもち、遊びを創造し

ていけるような、系統性・順序性をふまえた指導内容や指導方法を考える。

ことによって、教師の指導のめやすとなる「調整力を高める運動遊びの年間指導計画」を作成する。

### (3) 研究の方法

#### ○ 第1年次

1) 従来の教育課程の中から、運動遊びに関係のある活動を抽出して、ねらいの要素を分析し、検討する。

2) 遊びと運動能力との関係を調査する。

① 家庭における遊びの実態調査（全園児の家庭へのアンケートによる）

a 居住地域・遊び場・遊び仲間・遊び時間・好みの傾向

b 母親の遊びに対する理解度

② 運動能力調査（全園児）

a 握力      b 立巾跳      c 開眼片足立ち      d サイドステップ

e とび越しくぐり

・ 家の外での遊び時間は、運動能力にプラス（とくに女兒）であり、運動能力の発達する時期の運動的な遊びは、運動能力の発達に良い傾向をもたらす。

・ 遊び仲間の人数は、運動能力にあまり影響を及ぼさないが、兄弟の影響はある程度運動能力に関与していると考えられる。とくに女兒に影響力があるようだ。

・ 母親の遊びに対する理解度は、男児の場合さほど運動能力の発達に影響を与えていないようだ。

3) 幼年期の幼児・児童の調整力発達の検査（園児と小学生を追跡）

a 平衡性－開眼片足立ち，足踏み，バランスメーター

b 敏捷性－反復横とびの全身反応時間

c 巧緻性－とびこしくぐり，ボールけり

d 律動調整力－ケンパー3課題（KKP，KP，KKKP）

e 筋力－立幅とび，握力

・ 静的平衡性（開眼片足立ち）および、律的平衡性（ケンパー）は女兒の発達がはやく、動的平衡性（バランスメーター）巧緻性測定種目のとびこしくぐりでは、男児の方が優れている傾向が見られた。

・ 各要因の測定種目内では、ほとんど相関が認められなかった。また、各要因の相互関係では平衡性と巧緻性に関連があり、バランスメーターにはかなり巧緻性の要因が含まれていると思われる。

- ・ 追跡的資料から、個人差の大きいことと共に、発達にも個人的特性がうかがえる。
- ・ 崩れた平衡を元に戻す能力は、平衡を崩さない能力ほどには、発達が見られない。

#### 4) 幼児の協応能力の発達に及ぼす学習効果の実験（5歳児）

##### ① 協応能力調査（実験群・統制群）

- 目と脚の協応能力（ボールけり）
- 目と腕の協応能力（ボールの狙い投げ）
- 目と全身の協応能力（とびこしくぐり）

##### ② 運動学習（実験群）

- サッカーごっこ，ボールけり競争，サークルボールけり
  - 中・小フープのボール投げ入れ，バスケットのボール投げ入れ競争，ドリブル競争
- 目と脚，目と腕の協応能力を高められる運動学習を行なった場合，その部位の協応能力の発達は著しく，テスト成績は有意差の認められる向上を示した。
  - 運動学習への参加の積極性や興味の度合が協応能力の発達に関与すると思われる。  
男女の興味を把握して，両者が好んで行なう運動学習によって能力を伸ばすことを考える必要がある。
  - 目と脚，目と腕の協応能力は短期間の集中的学習の方が効果的であるが，夏休み後に能力は低下した。しかし，通常保育にもどって運動学習を再開するとすぐ回復した。

#### 5) 抽出幼児の追跡研究

日常の遊びの観察，調整力の調査

以上，第1年次，基礎的研究資料はB5版141頁にまとめて報告した。

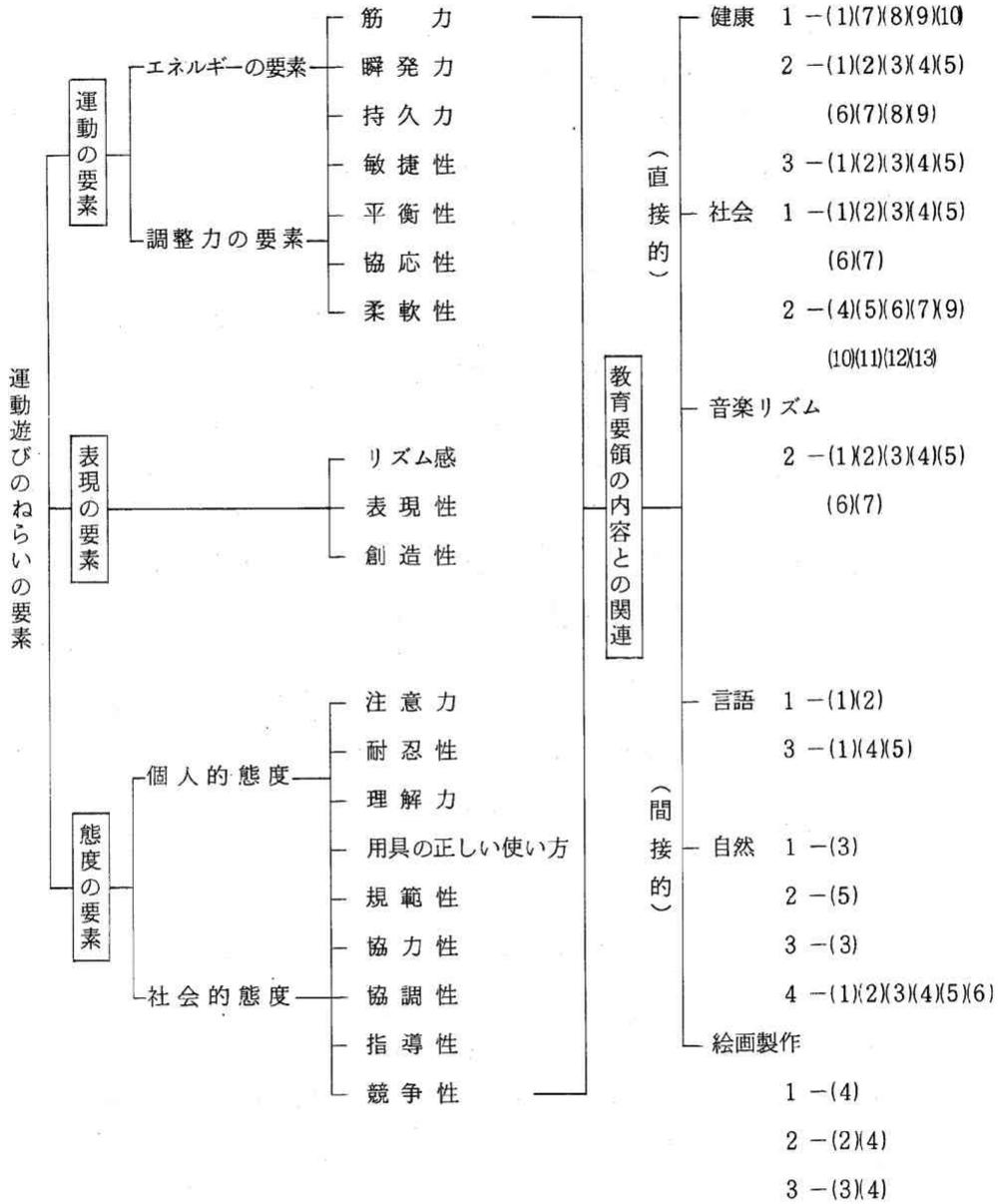
#### 第2年次

第1年次の研究基礎資料に基いて実際指導の研究を重ねながら，年間指導計画試案の作成に着手した。

##### 1) 運動遊びのねらいの要素と幼稚園教育要領6領域との関連の検討

運動遊びのねらいの要素と幼稚園教育要領の6領域との関連の検討により，運動遊びは領域「健康」のみではなく，各領域の内容と深くかかわり，全人的教育をめざすことを確認した。（表1）

[表 1]



## 2) 基礎的運動器具の検討

幼稚園で使われているさまざまな運動器具は、活用する必要があるのか、果して有効に活用されているのだろうか、また、子どもたちが運動器具を利用して遊んでいるときに教師はどのような指導助言をすればよいのだろうか、これらのことを知るために、運動器具の教育的価値を検討する必要がある。

そこで一般にどの園でも使われている、ボール・つな・とび箱・マット・平均台について、①運動の要素、②運動のパターン、③運動の内容、④活用にあたっての留意事項の4項目にわたって検討し、「運動器具の基本的活用」表を作成した。

## 3) 施設・遊具の活用状況調査

幼児は幼稚園の施設や遊具に刺激され、それを活用して遊ぶことで多面的に経験を広げ、さまざまな試みをしながら経験を深めていく。そこで園内の施設・設備が日常どのように利用されているかを継続的に観察し、その記録から実態を把握して教育的価値と指導の方向をさぐった。

- ① 自由選択遊び中における遊びの分布
- ② 三輪車・二輪車の使用を制限した場合の幼児の反応

## 4) 調整力を高める運動遊びの年間指導計画試案の作成

実験的な指導実践を積み重ね、子どもたちが興味をもった遊びや、指導のねらいを効果的に達成できた遊びを精選して、系統的・段階的な指導内容と方法を検討し、年齢・保育年数・季節等を配慮して配列した。

## 5) 追跡幼児の継続調査

第1年次に抽出した各クラス6名ずつの幼児について、次の項目の調査を行い、指導方法を考察した。

- ① 日常の遊び、友だち関係等の観察
- ② 社会性発達検査、性格診断検査
- ③ ソシオメトリー
- ④ 調整力検査（ボールけり、ボールの狙いげり、目と足、目と手を協応させての玉入れ、とびこしくぐり、ケンパー）

第2年次の研究のうち、主として基礎的運動器具の活用と、指導計画試案を資料編として、B4版134頁にまとめて報告した。

### ○ 第3年次

第3年次の研究は、2年次の研究の結果から多面的に運動ができ、しかも、望ましい友だち関係を育てるのに効果的な運動遊びとして、とくにボールおよびつなを使っ

の工夫と、異年齢が混合しての運動遊びの指導法に重点をおいて研究を進めた。

1) 協応能力の追跡調査(目と脚の協応)

- a 脚でのドリブル b 狙いげり c けり返し

2) 学習効果と協応能力の関係調査

なわとび、まりつきについて、実験群と統制群の学習効果と、目と腕・目と脚の協応能力の発達を比較

3) 2年次作成の指導計画の実践と再検討

4) 異年齢混合による運動遊びの指導方法の工夫

異年齢混合保育については、地域社会での異年齢混合の子ども集団の減少による問題が注目された昭和52年度から、毎週土曜日は同年齢による学級を解体して、意図的に3・4・5歳児混合のグループを構成して活動させてきたが、その経験を生かして、運動遊びを通して望ましい人間関係を育てたいと考えた。そこで年長組と年中組の子どもがペアになって好きな運動遊びを選び、同じ運動遊びを選んだ子どもたちが集ってできた集団が、遊び方やルールを作り、互いに助け合って遊べる機会を作るようにした。

昭和54年10月の研究発表会において、その活動状況と効果の一端を実際に公開するとともに、3年間の研究の総括を書籍「調整力を高める運動遊びー3・4・5歳児の指導ー」をひかりのくに社から発行した。

## まとめー とくに問題点と関連してー

(1) 運動遊びと人間形成

運動遊びを通して人間形成をめざす指導を実践するにあたって、研究の途上で子どもたちとのかかわりの中から反省を迫られ、問題点として考慮した点を挙げてみる。

1) 運動遊びに偏らず、多様な経験をさせる。

研究課題に運動遊びをとりあげていると、教師の意識が運動遊びに偏りがちになるけれども、子どもたちの多様な要求を満足させるためには、多様な経験や活動によって、それぞれのやり方で十分自分の思いを表現させてやりたい。そのためには運動遊びで心を開放するとともに、からだやことばや造形など多様な方法で十分に自己表現をさせたい。

2) 好ましい人間関係をつくる。

運動遊びは、うまい・へた、または勝った・負けた、ということ子どもたち自身が気にすることが多いので、そのようなことで自信を失ったり友達関係をそこねたりすることのないように、友達を思いやったり、助け合ったりする気持を育てることを重視し、結果よりは努力した過程を認め励ますことに一層留意しながら、ひとりひとりの子どもが十分自己を発揮し、友達に認められ、友

達と協力する喜びを知るように努めた。この事は運動遊びでは効果的に達成できるだろうと考えたからである。

### 3) ルールの必要性に気づかせ、子ども自身でルールをつくり出させる。

運動遊びはルールをつくり、それを守ることで一層楽しくなるものである。したがって、簡単に容易な遊びからルールになれさせて、子ども自身がルールの必要性に気づき、自らルールを作り出して、それを守って遊べるような機会を多くしたい。とくに年長組では、チームを組んで遊べるような競技を子どもの能力に合わせて指導し、チームゲームでのさまざまな障害に直面させながら、それらの課題を友だちと協力してのり越えることに喜びを感じさせるように心がけた。

## (2) 基礎的能力の指導と自発学習

### 1) 運動遊びに自信をもち、自ら遊びを創造する意欲を育てる。

子どもは自分でやってのけられたということで自信をもち、1つずつできることが多くなることに励みを感じる。しかし、多くの友達が自分でこなしていることが自分にはできないときは自信を失う。それがおとなから見れば、さ程重大なこととは思えない事柄でも、子どもにとっては友達との遊びに疎外感をいだいて、生活全体に自信を失うことさえある。したがって、子どもが友達とともにさまざまな運動遊びを楽しむことができ、成功の喜びを感じることができるよう、基礎的な能力を身につけさせたい。そのためには、子どもの発達に必要な態度や技能・知識とはどのようなものなのかを研究する必要がある。経験が狭く、浅い子どもたちが、創造活動を行うためのヒントや資料が得られなかったり、そのてだてが見つけれなかったりすれば、創り出す意欲を失うおそれがある。子どもがこのことさえできれば、それを活用して自ら発展していけるというような基礎的内容をさぐり、先生や友だちのやり方を見習いながら学習させたい。

### 2) 子ども自身がめあてをもって活動できるようにする

教師が運動遊びを工夫する場合、子どもたちがそれぞれ自分でめあてをみつけて意欲的に、子どもたち同士で展開していけるような運動遊びの工夫に努めたい。そのためには、技術やルールが難しすぎるものではなく、子ども自身が努力点を見つけ、自分自身でそれを評価できるようにしたい。子どもたちが外的な刺激にひきずられたり、表面的な評価にひきずられたりせずに、内発的な動機によって活動できるようにするための教師の方向づけを研究する必要がある。

以上のことを研究上の問題点としてふまえながら3年間研究を続けてきた。

## 2. 調整力を高める運動遊びの指導

中 村 き み

### (1) 当園の運動遊びの施設・設備

当園にはふたつの園庭があり、Aは主として4・5歳児が使用し、Bは3歳児が使用している。それぞれ発達段階を考慮して、幼児がすすんで運動したくなるような環境づくりを心がけている。

例えば、年長・年中組が主として使用する園庭Aでは、フットベースボールやハンドボール遊びなどのゲームが展開できるように、平地空間を広くとっている。そして、遊具は互いに関連を保ちつつ、遊びの流れがスムーズに移行できるように留意している。とくに土堤の斜面を利用してのロッククライミングや、土堤の上に高さ2.5mの展望台と長い滑走面の滑り台を設置したり、土堤を利用して下の池に小川を流すなど園地の自然利用を考慮している。

また、表面が平らで弾力性のあるプレイコートは、まりつき、なわとび、とび箱、平均台あそびなどによく活用されている。それは、ボールがよくはずんで遊びやすかったり、着地した時にからだに与える衝撃が少ないのでマットを敷かないでもとび箱あそびができるなどの点でよく活用されている。

3歳児の園庭Bでは、花壇・噴水・ままごとの家・砂場などがあり、高さ1.6mの小山とその下にあるトンネル、更に1人乗り、2人乗り、数人乗り用のぶらんこなど遊びやすく楽しい雰囲気づくりに重点を置いている。

### (2) 自由選択活動における遊びや施設利用の実態調査

まず、これらの環境の中で、幼児は施設・設備をどのように活用しているのであろうか。そこには年齢的な傾向、季節的な影響、指導による変化、男・女差などはあるのだろうか。物的環境・人的環境の両面から探って幼児の遊びの姿の実態をとらえることにした。

#### 1) 目的

幼児が園庭で自由に遊びを選択している時の園庭の施設・設備の活用状況を把握し、幼児の遊びの傾向や年齢別の遊びの内容を調査する。

#### 2) 調査方法

- ・対象 学級のほとんどの幼児が園庭で遊んだ日の全園児157名
- ・項目 戸外での自由遊び時における遊びの種類と人数
- ・調査実施月 53年 5月 7月 11月  
54年 2月 7月
- ・調査時間 1日30分間（自由選択活動の時間内）10分毎に記録する
- ・調査回数 学級記録延75回

#### 3) 結果

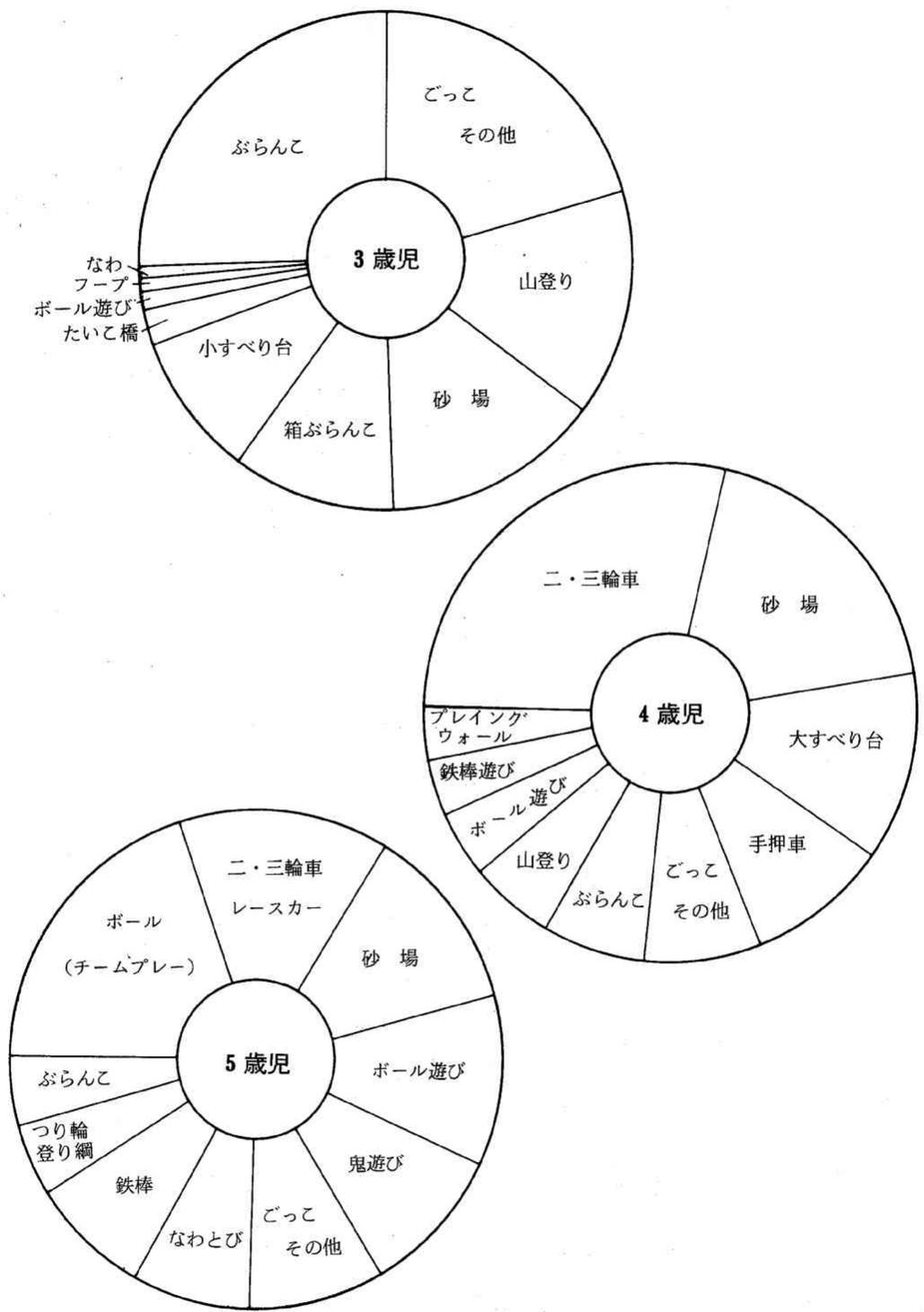


図1 自由遊びに見られる遊具・用具の活用状況

これは、各年齢毎に利用人数の多いものを順に10位までをあげたものである。3歳児と4・5歳児では遊びの場（園庭）が異なるので、必ずしも同一の条件ではないが、年齢によって好まれる遊びの傾向は、ほぼつかめるように思われる。

即ち、3歳児はぶらんこが圧倒的に多く、4歳児は二輪車・三輪車などの乗物、5歳児はボールを使ってのチーム遊びがそれぞれ1位になっている。二輪車・三輪車は4・5歳児用の園庭にあるので、3歳児では遊びの調査にはあられないが、幼児にとって乗物は非常に興味のある遊具の1つである。

また、どの年齢にもよく使われている施設に、砂場と二輪車・三輪車がある。これらは各年齢とも上位にはいり、子どもたちによく活用されている。砂場は子どもたちの想像性を満足させ、どの年齢の幼児にも抵抗感の少ない楽しい遊び場となっている。

・環境を変えた時にみられた遊具活用のしかた ー図2ー

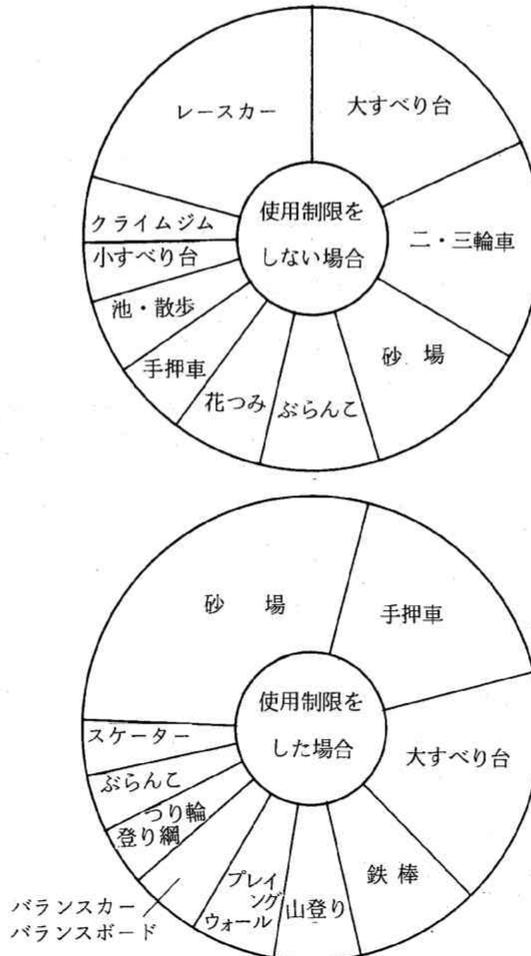


図2 4歳児に見られる遊具(二・三輪車・レースカー)の使用制限をしない場合とした場合の比較

では、このようによく使われる二輪車・三輪車を、幼児の目にふれない倉庫に収納してしまったら、この乗物に代ってどのような遊びがでてくるだろうか。即ち環境を変えた時にみられる遊具活用のしかたを、2年目の同じ月（6月）に実験をした。

図2は、4歳児にみられる遊具（二輪車・三輪車、レースカー）の使用制限をしない場合と、制限をした場合の比較である。乗物の使用制限をしなかった時は3位であった砂場が、制限をすれば1位となり、前年度7位であった手押車が2位になっている。二輪車・三輪車が使えなくなると、それに代って手押車が上位となったのは、4歳児にとって動くもの、乗物への興味が非常に大きいことがわかる。更に、制限しなかった時には10位内にあがってこなかった鉄棒・プレイングウォール・バランスカー・バランスボード・つり輪・登り綱など技術をともなう遊具に、自分の力を試そうとしている姿がみられる。

このようにいつも幼児の自由選択のみにまかせていると、遊びに偏りができる場合があるので、そのような時に一度環境を変えることによって、それが刺激となってまた新しい遊びと出会うことができる。4歳児では乗物が使えない日、今まで全く見られなかった野球ごっこのような遊びが、年長組の遊びをまねながら自発的に仲間と相談してやり始めるなど、よい経験をさせることができた。

・年齢による遊具選択の傾向 — 図3 —

では年齢によって特に好みの傾向がみられる施設・用具はあるだろうか。図3は施設・用具の使用に見られる年齢別の好みの傾向を表わしたものである。

ぶらんこは、圧倒的に3歳児が多く、4・5歳児に少ない。これは全身でこぐ快感を味わいながらひとりでも遊べる点が年少児に好まれるのであろう。4歳児も1学期はよく活用しているが、後期になると他の遊びへと移行していく。5歳児では、時折思い出したように女兒が利用する程度である。

山登りは、3歳児が多く、登ったり降りたりの単純な運動をくり返し、全身を動かせる運動を好むことがよくわ

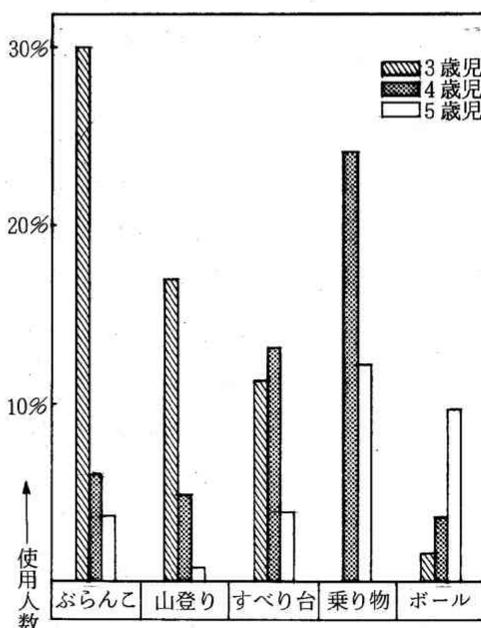


図3 年齢によって特に好みの傾向がみられる施設・用具

かる。

すべり台では、4歳児が一番よく活用している。ほとんどが大きい滑り台で遊び、小さい滑り台はわずかである。5歳児も大きい滑り台を使ってはいるが、3・4歳児のように単に滑って楽しむだけではなく、滑り台を基地としてごっこを展開していることが多い。それに比べて4歳児は、滑り台そのもののスリル感を楽しみつつ、いろいろな滑り方を試している。

乗物は、園庭Aにある関係上、3歳児にはあがってこないが、4歳児が特に多く活用している。

ボール遊びは、5歳児が多く3歳児に少ない。3歳児は集団経験として学習しても、自由遊びではあまり自発的に取りあげようとはしないようで、4歳児も同様に限られた子どもがひとり遊び的に使っている程度である。しかし5歳児になると、自由遊びでフットベースボールやバレーボール遊び・サッカー遊びなどのチームプレーが多くなる。5歳児ではボールを扱う技術的な能力を活用すると共に、チームを組んで互いに協力し合って遊ぶなど社会性も著しく発達していることがわかる。

即ち、3歳児はぶらんと・山登り、4歳児は乗物・滑り台、5歳児は乗物・ボールを使って遊ぶことを好む傾向があるようである。

#### ・季節による遊具選択の変化 -図4-

よく使われる施設でも、季節による変化はみられる。即ち砂場での月別使用数を比較してみよう。

5月がどの年齢も多く利用し、7月は5歳児は水着のまま砂場で遊び、3・4歳児はプール遊びをするための着替えや休息に時間をとられて砂場へ出る機会が少なくなる。11月の3歳児は、園生活に慣れてよく活用しているが、その頃の4・5歳児は砂場以外の遊びへと移り、更に2月になると寒さの関係であろうかどの年齢も非常に利用度が低くなっている。

また、なわとびやボールけりのような全身を動かす運動は、秋から冬にかけて多くなり、季節と共に遊びの内容も変化するものがある。

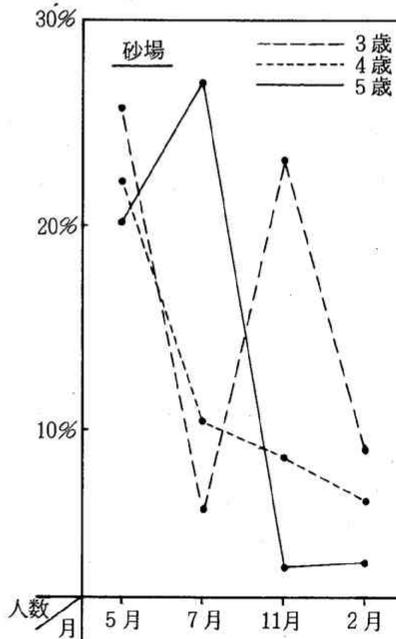


図4 季節による施設使用率の変化

・ 5 歳児男・女の運動遊び選択状況の比較 一図 5 一

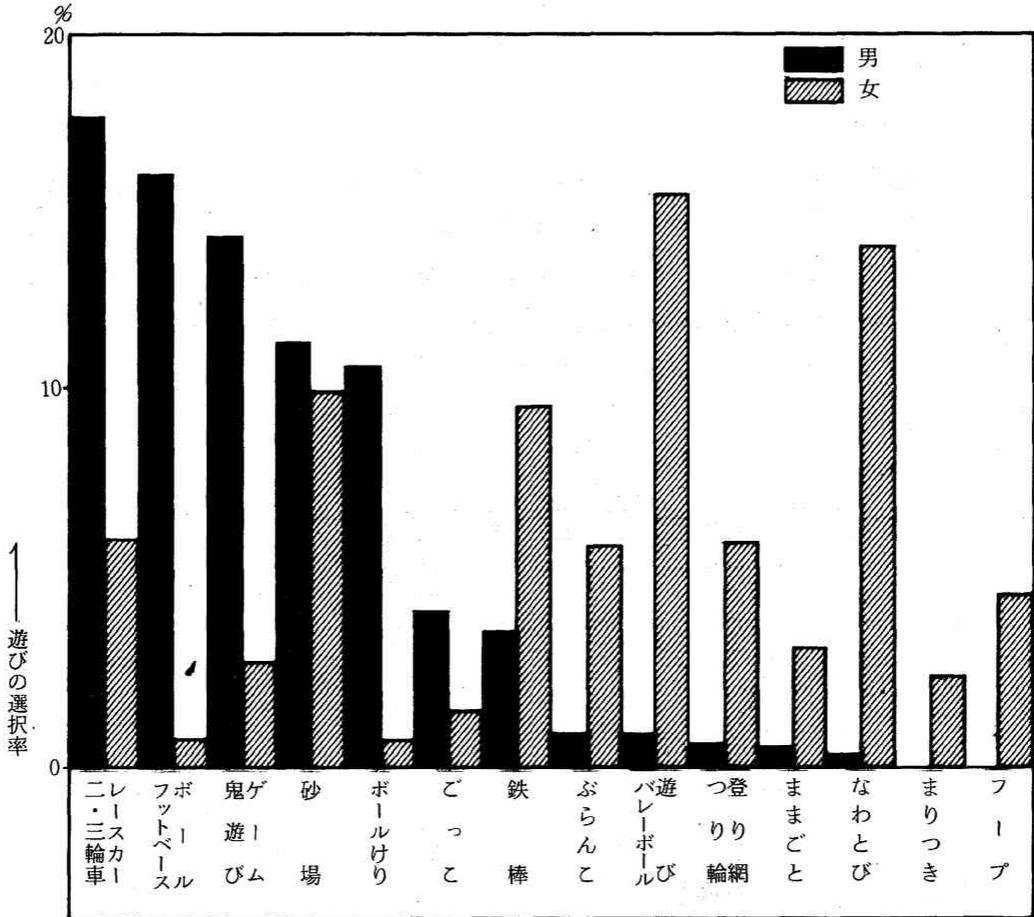


図 5 5 歳児男・女の運動遊び選択状況の比較

子どもたちが自由に自然に遊んでいる姿を見ていると、男児が好む傾向の遊びと女児が好む傾向の遊びとがあるようである。そしてそれらの遊びの中には 3・4 歳児では性差はあらわれないが、5 歳児になると非常にはっきりと特色づけられてくる遊びがみられる。

図 5 は、5 歳児の遊びの中で特に男児に多い遊び、女児に多い遊びをあげて比較している。

男児は、二輪車・三輪車、野球遊び、フットベースボール、鬼遊びなどが多く、乗物や全身を用いる激しい移動運動及びゲームなどに興味をもつようである。

女児は、バレーボール遊び、なわとび、砂場、鉄棒、つり輪など技巧的な遊びが多く、リズム的な運動は男児よりも女児の方に好まれている。

同じ球技でも、男児はフットベースボールやサッカー遊びなど、足を使って広範囲に移動する運動が多いのに比べて、女児はバレーボール遊びやまりつきなど手を使う運動が多いの

は対照的である。

そして全般に男児はチームを組んで遊ぶことに興味をもち、女兒は技能面を活用する遊びを好む傾向がある。女兒は自分の好きな運動はよくするが、きれいなものにはあまり参加しないようで、サッカー遊びやフットベースボールも自然に放っておくと、女兒は敬遠し遊びの仲間に入りにくく、男児のみで遊ぶことが多い。そこで学級活動で全員に経験させて遊びの楽しさがわかると、研究発表会当日に公開したようにフットベースボール、ハンドボール遊びにも女兒も熱心にチームプレーに参加するようになる。それにはボールの扱いやルールなど教師の指導が必要になるのではないだろうか。

・遊びに見られるグループ遊びとひとり遊びの比較 - 図6 -

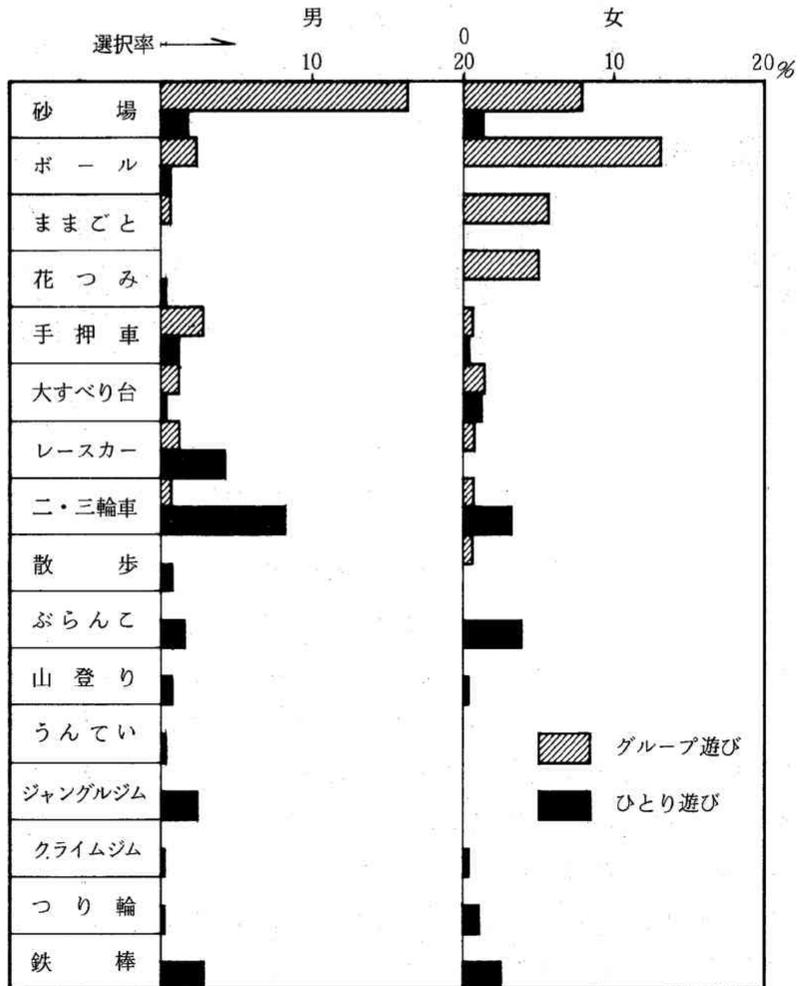


図6 遊びに見られるグループ遊びとひとり遊びの比較

子どもたちが自由に遊んでいる時の仲間関係はどうであろうか。グループ遊びの多くみられる遊びにはどのような遊びがあるのか、5歳児5月の記録から拾ってみよう。

グループで遊んでいるのは、男児は砂場、手押車、ボール、レースカーなどがあり、女児ではボール、砂場、ままごと、花つみ、大すべり台などで友だちと交渉をもちつつ遊んでいる。反対にひとり遊びの多いものに、男児は二輪車・三輪車、レースカー、鉄棒、ジャングルジム、ぶらんこなどがあり、女児のひとり遊びでは、ぶらんこ、二輪車・三輪車、鉄棒、大すべり台、つり輪などが個人遊びとなっている。このように遊具によって友だちといっしょに遊ぶほうが楽しいものと、ひとりで楽しむものがあり、子どもの要求に即した遊具がそれぞれ選択されている。

## (2) 調整力の発達調査

### 1) 3・4・5歳児における目と足の協応性の発達に関する実態調査

#### ① 目的

指導に当って、その系統的指導と、いつどのような指導をすればよいのか適切な時期と、発達をふまえた段階的指導の順序性などについての目やすをつかむために多面的に運動の要素をもっているボールを選び、調整力のうちとくに目と足の協応性の発達をまず調査した。

#### ② 調査方法

- ・ 対象 全園児（3・4・5歳児） 157名
- ・ 期間 昭和54年5月～7月
- ・ 項目 ボールによる目と足の協応性検査
  - ① ねらいけり
  - ② けりかえし
  - ③ 足でのドリブル

種目	項目	方 法	評 価
ねらいけり		3m前方のアーチの中にボールをけり入れる。	5回試み成功した回数
けりかえし		斜面を転がりおりてくるボールをまっすぐけり返す。	動いているボールをけるタイミングとボールの方向を5段階で評価
足でのドリブル		円周に沿って（直径内円3m、外円5m）ボールを足でドリブルしながらまわる。	所要時間（秒）

注) 使用ボールは直径25cmゴム製のもの

### 3) 結果

#### 目と足の協応検査の結果

表2 ねらいけり（トンネルとおし）の発達

月	性別	3 歳			4 歳			5 歳		
		6 組	5 組	平均	4 組	3 組	平均	2 組	1 組	平均
5 月	男	1.71	1.4	1.6	2.0	2.5	2.2	2.7	2.4	2.63
	女	2.4	0.9		2.3	2.0		2.8	2.5	
	平均	2.05	1.15		2.15	2.25		2.75	2.45	
7 月	男	2.57	2.25	2.11	2.75	3.12	2.65	2.9	3.06	3.11
	女	1.6	2.0		2.25	2.5		3.3	3.18	
	平均	2.09	2.13		2.5	2.8		3.1	3.12	

注) 成功した回数

表3 けりかえしの発達

月	性別	3 歳			4 歳			5 歳		
		6 組	5 組	平均	4 組	3 組	平均	2 組	1 組	平均
5 月	男	2.23	2.45	2.34	2.9	3.3	2.9	4.0	4.29	3.84
	女	1.9	2.8		2.7	2.7		3.2	3.88	
	平均	2.06	2.62		2.8	3.0		3.6	4.08	
7 月	男	3.02	2.97	2.8	2.98	3.5	3.15	3.7	3.54	3.58
	女	2.4	2.8		2.9	3.24		3.6	3.58	
	平均	2.71	2.89		2.94	3.37		3.6	3.56	

注) 5段階評価

表4 足でのドリブルの発達

月	性別	3 歳			4 歳			5 歳		
		6 組	5 組	平均	4 組	3 組	平均	2 組	1 組	平均
5 月	男	40.98	95.6	64.64	28.8	18.34	23.07	19.8	14.5	17.55
	女	52.59	69.5		24.9	20.25		20.5	15.5	
	平均	46.79	82.5		26.9	19.23		20.1	15.0	
7 月	男	30.7	42.3	41.17	27.6	23.8	22.85	15.8	13.28	15.46
	女	67.28	24.4		20.8	18.86		19.2	13.56	
	平均	48.99	33.35		24.2	21.5		17.5	13.42	

注) 一定距離に要した時間(秒)

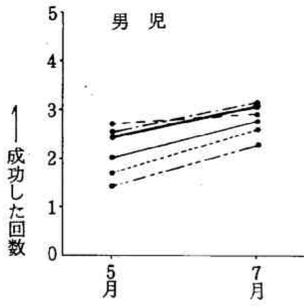


図7-1 ねらいけり（トンネルとおし）の発達（男児）

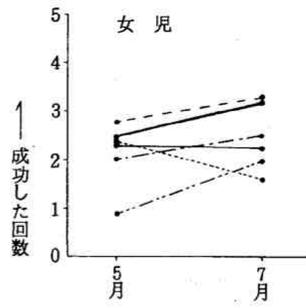


図7-2 ねらいけり（トンネルとおし）の発達（女児）

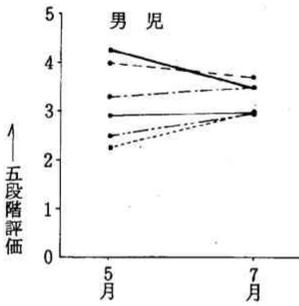


図8-1 けりかえしの発達（男児）

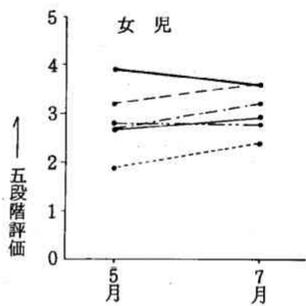


図8-2 けりかえしの発達（女児）

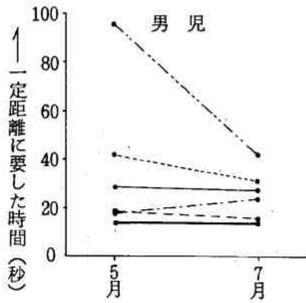


図9-1 足でのドリブル（半円のボール運び）の発達（男児）

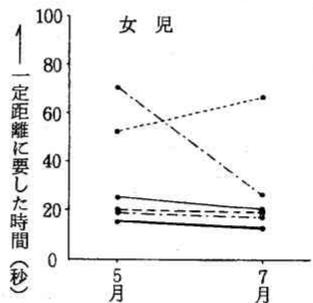


図9-2 足でのドリブル（半円のボール運び）の発達（女児）

- 注)
- 3年保育年長（1組）
  - - - ● - - - 3年保育年中（3組）
  - 3年保育年少（5組）
  - .....●..... 3年保育年少（6組）
  - 2年保育年長（2組）
  - - - ● - - - 2年保育年中（4組）

#### ▲ねらいけり ー表2ー

これは静止しているボールを3m前方の目標地点までまっすぐけることはどの程度できるかについて5回試みて成功した回数をとった。

結果は、静止しているボールをけることは、3歳児でも比較的やり易かったようで、各年齢共に上昇している。特に3歳6組男児、5月は成功回数が1.71回で7月は2.57回に、5組男児、1.4回～2.25回に、4歳4組男児、2.0回～2.75回に、5歳1組男児、2.4回～3.06回とどの学級も特に男児により結果がでていいる。男児にける遊びが多いのも何か関係があるのだろうか。

この結果から、まず3歳児でも静止している的をねらってけるという遊びができると考え、興味をもってけることができるように、ボールをけてかん倒しをしたり、自由にいろいろな方法でける運動をとりあげた。

#### ▲けりかえし ー表3ー

斜面を転がりおりてくるボールをまっすぐけり返えさせ、ボールをけるタイミングとけり返したボールの方向(角度)で5段階評価をする。

結果は、4歳児学級の2年保育4組と3年保育3組を比較すると、全般に3組の方がよい結果がでていいる。これは4組は4月入園して間もなくの調査であったのに対して、3組は幼稚園生活2年目で3歳児学級の頃からボールに親しんでいた。7月の3組男児3.5、女児3.24は、5歳児1組とほぼ同じ程度の成功率を示している。このような結果があらわれた原因は、3組は3歳児学級の時にボールをける遊びを多く経験したためであろうと思われる。このように経験による学習効果が高いことがよくわかる。

#### ▲足でのドリブル ー表4ー

円周に沿って(直径内円3m、外円5m)を、はみ出さないように足でドリブルしながらまわる。評価は所要時間(秒)を計る。

結果は、年齢別に比較すると、3歳児5月平均64.64秒に対して、4歳児平均23.07秒、5歳児平均17.53秒と、先の2種の検査と比べて、年齢が高くなる程成功率が高く、特に3歳児は手を使わないで足だけで円周上をけりながら進むということはむずかしいようである。

3歳児は片足で立ちながらもう一方の片足でボールを操作することがむずかしく、ラインからはずれるとすぐ手を出してボールを追いかけようとする。4歳児はやや片足でコントロールしようとする気持は動くが、実際にはボールを止めたり動かししたりするテクニックがわからないようである。5歳児になるとける時の足の向き、力の調節、ボールの止め方、ラインからはずれそうになるとすばやくからだを移動して止めるなど、突差の機敏な処置のしか

たや、たえずボールを見つめながら注意し、けんめいに目的地まで運ぼうとする意欲や集中力が表われていた。

こうした運動は技巧を要する上に、注意や集中力を必要とするので年齢差が大きく影響することがわかる。5歳児はこの調査を経験すると、足でのドリブルに興味をもって自由にドリブルごっこをしながら、自然にサッカー遊びへと意欲的に発展させることができた。

## 2) 調整力の学習効果の実験

### ① 目的

運動遊びは元気に戸外で遊んでさえいけば自然に力がつくのではないか、即ち運動遊びは特別に指導をする必要がないのではないかという意見もあるが、もし指導しなければ、指導したグループとどの程度の差があらわれるのかを実験してみた。そしてその経験が他の種の調整力の発達にどのように影響するかの2点について調査をした。

### ② 調査方法

- ・ 対象 5歳児（3年保育年長31名，2年保育年長32名 計63名）
- ・ 期間 昭和54年5月～10月
- ・ 項目 まりつき，なわとび，けんけんぱ（KKP），的あて，とび越しくぐり。

種目	実験群	統制群
まりつき	1組（3年保育年長）	2組（2年保育年長）
なわとび	2組（2年保育年長）	1組（3年保育年長）

学習する組を実験群とし、学級としてはとくに指導せず自然な状態にしておく組を統制群とする。1組はまりつきを学習し、2組はなわとびを学習する。そして両方の組のまりつきとなわとびの状態及び調整力を調査して比較する。

### ③ 結果

表5 学習効果の実験結果

表5-1 まりつきの発達

性別 対象月	段階	男			女		
		1	2	3	1	2	3
実験群	5月	60	40	0	19	81	0
	7月	13	33	53	0	6	94
	9月	0	27	73	0	6	94
統制群	5月	62	38	0	13	87	0
	7月	40	53	7	6	38	56
	9月	19	50	31	0	13	87

表5-2 なわとびの発達

性別 対象月	段階	男			女		
		1	2	3	1	2	3
実験群	5月	88	12	0	40	60	0
	7月	33	33	33	19	25	56
	9月	25	63	12	6	25	69
統制群	5月	87	13	0	38	62	0
	7月	47	53	0	13	27	60
	9月	40	47	13	13	43	44

注) 3段階評価の百分比

表6 年長組調整力検査の結果

組	性別	種目	とび越しくぐり		K・K・P		的あて	
		月	5月	7月	5月	7月	5月	7月
1組	男		8.31	8.80	4.47	3.87	1.40	1.87
	女		9.23	8.59	4.80	5.00	1.19	1.73
	平均		8.77	8.69	4.63	4.43	1.29	1.80
2組	男		8.86	9.04	4.50	4.75	1.25	1.33
	女		9.70	9.38	4.73	4.88	1.60	1.63
	平均		9.26	9.22	4.61	4.81	1.42	1.48
評価単位			全身反応時間(秒)		5段階		5回のうち成功した回数	

図10-1は男児のまりつき学習効果の経緯である。

実験群は5月は評価1の段階が60%であったのが、9月は0%となっているのに対して、統制群は5月62%～9月19%になっている。自然に遊んでいると9月現在19%程度の子どもがまだリズムカルにつくことができないということになる。

同様に女兒についてみると、図10-2女兒は男児に比べて非常にリズムカルにつく子どもが多い。その中で実験群と統制群について比較すると、実験群5月には評価1の子どもが19%いたのが7月には0%となり、9月には2の段階が6%、3の段階が94%と、全員がつけるようになっている。統制群の女兒は5月では1の段階が13%で実験群よりも少なかったにもかかわらず9月では3の段階が実験群よりも少ない結果となり、学習の効果が実験群にあらわれている。

図11はなわとび学習効果の経緯である。

男児、実験群は5月評価で1の段階が88%であったのが、9月には25%に減り、統制群は5月87%であったのが9月40%になっている。

女兒も実験群は5月評価1の段階が40%であったのが9月6%に減り、統制群は5月38%であったのが9月13%になっている。

このようにまりつき、なわとび共に学習をした実験群の成績がよいということは、学習による効果が大きいといえるようである。

では、これらの学習効果は、調整力にどのようにあらわれてくるのであろうか、両群の結果を比較してみよう。

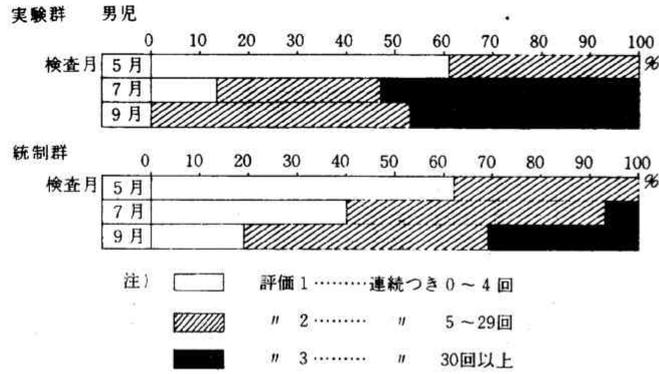


図10-1 まりつき学習効果の経緯(男児)

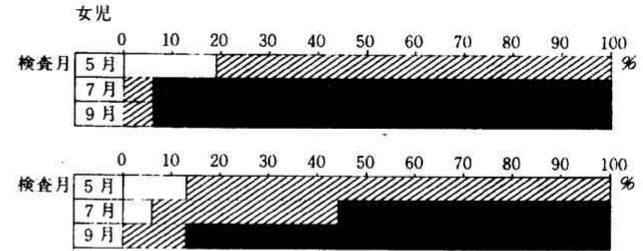


図10-2 まりつき学習効果の経緯(女児)

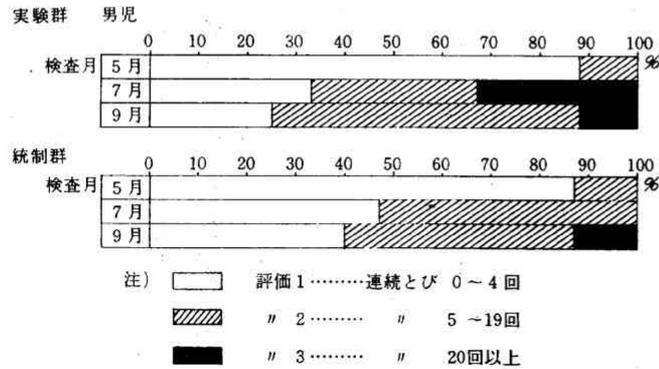


図11-1 なわとび学習効果の経緯(男児)

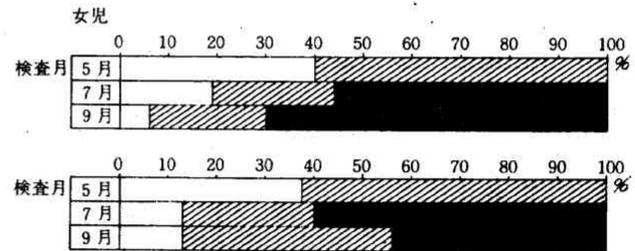


図11-2 なわとび学習効果の経緯(女児)

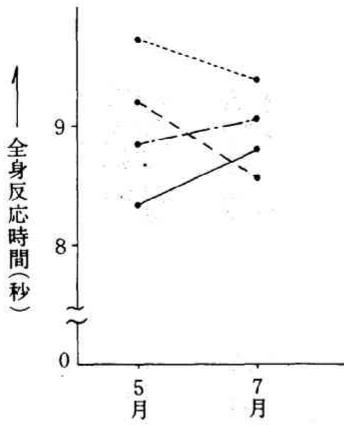


図12 とび越しくぐり

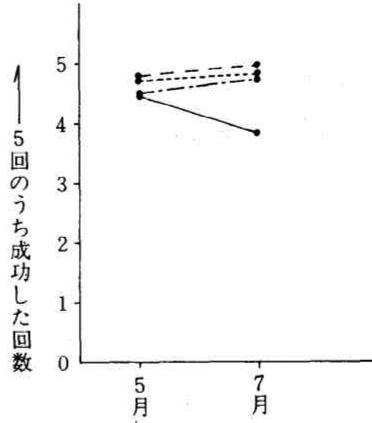


図13 K K P

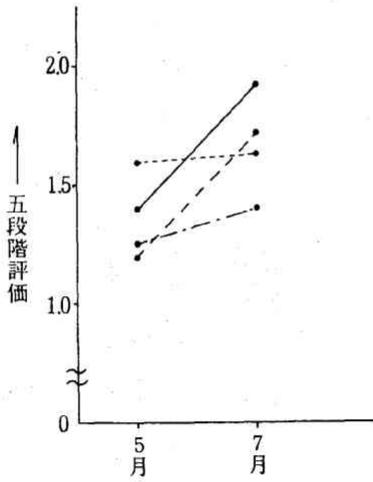


図14 的あて

図12～14 実験群，統制群の調整力の発達

注) ——— 1組男 } まりつき実験群  
 - - - - - 1組女 }  
 - · - · - 2組男 } なわとび実験群  
 - - - - - 2組女 }

まりつきを学習した実験群1組は、統制群より目と手の協応性（ボールの的あて）に著しい進歩を示し、なわとびを学習した実験群2組は、目と足の協応性とリズム感（KKP）に大きな進歩を示している。

意図的になわとびを学習しなかったなわとび統制群の女兒や、まりつきを学習しなかったまりつき統制群女兒が、実験群と同程度の数値を示している。これは日常の観察から、実験群に刺激されて女兒が自発的に学習したものと思われる。特になわとび、まりつきは女兒に好まれる遊びであったせいもあったのであろうか。

これらの調査結果からもいえることは、ある種の運動のみをしているとその種目は上達するが、全体的な円満な発達は望めない。即ち発達途上の子ども達に偏りのない幅広い調整力を身につけさせる必要のあることがわかる。

### (3) 調整力を高める運動遊びの検討

これらの調査をもとにして、調整力を高める運動遊びにはどのような遊びがあり、その活動によってどのようなねらいが達成されるか、指導に当っては発達段階をふまえた系統的指導をどのように考えればよいか、その指導方法と内容についての検討をした。

#### 1) 教育内容の検討

##### ① 従来の教育課程の検討

幼児の日々の活動の中で、調整力を高める運動遊びとはどのような遊びであるのか、その遊びの内容を探るためにまず従来の教育課程の中から運動遊びを抽出し、その運動遊びのねらいの要素を分析・検討した。

ねらいの要素としては、a 運動の要素、b 表現の要素、c 態度の要素にわけた。a を更にエネルギーの要素（筋力・瞬発力・持久力）と調整力の要素（敏捷性・平衡性・協応性・柔軟性）にわけている。bは（リズム感・表現性・創造性）、cは個人的態度（注意力・耐忍性・理解力・用具の正しい使い方）と社会的態度（規範性・協力性・協調性・指導性・競争性）にわけた。

そして、各年齢毎に年間の運動遊びを拾い出し、それぞれの活動のねらいを上記のねらいの要素で検討し、そのねらいの程度を、5-非常に多い、4-やや多い、3-普通、2-やや少ない、1-非常に少ないの5段階にわけて1年間の活動を再検討した。

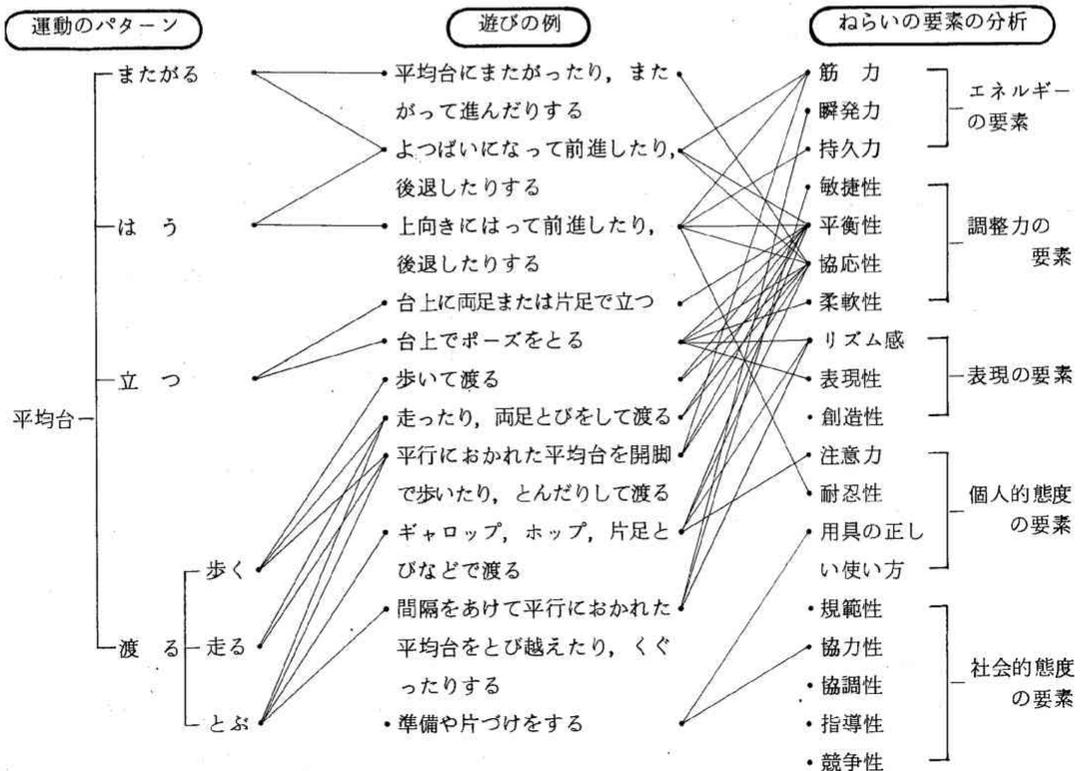
例えば、6月のマット遊びを各年齢で比較してみると、年中組の川とび・かえるとびでは、筋力・協応性・注意力・理解力・用具の正しい使い方を4としているので、遠くまたは高くとんだりすることを求めるよりは、身のこなしやマット運動のしかたに慣れたり、マットの取り扱いに慣れることをねらっていることがわかる。年長組では両足とびで瞬発力が4となっているのは、かなり遠くとんだり高くとんだりできるようにねらっている。

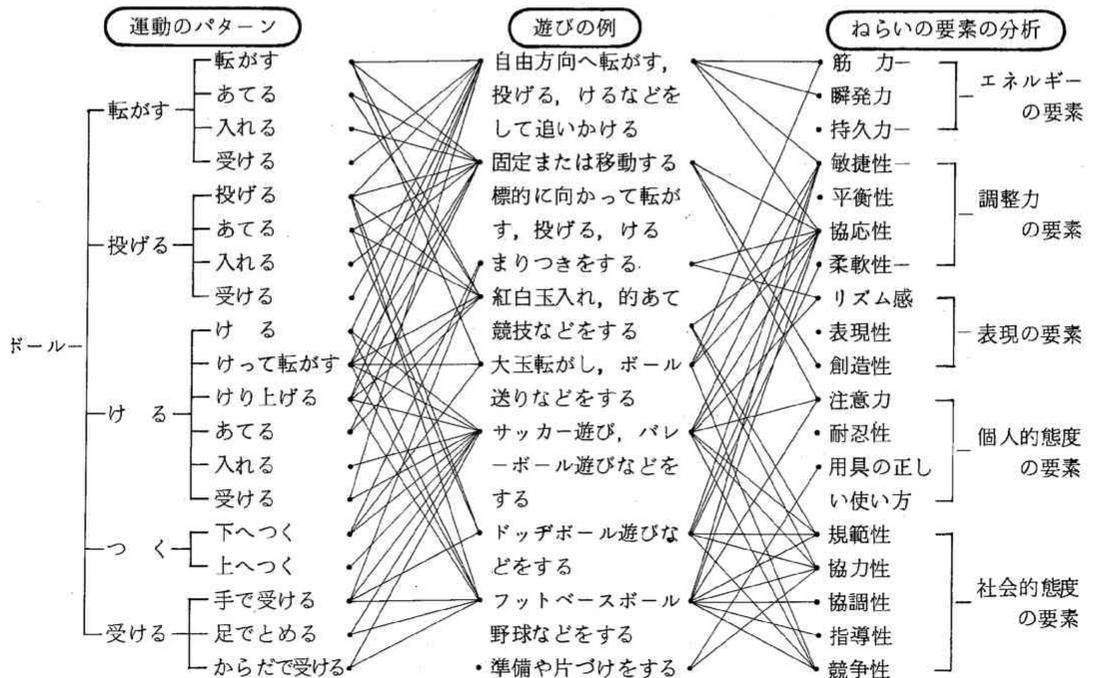
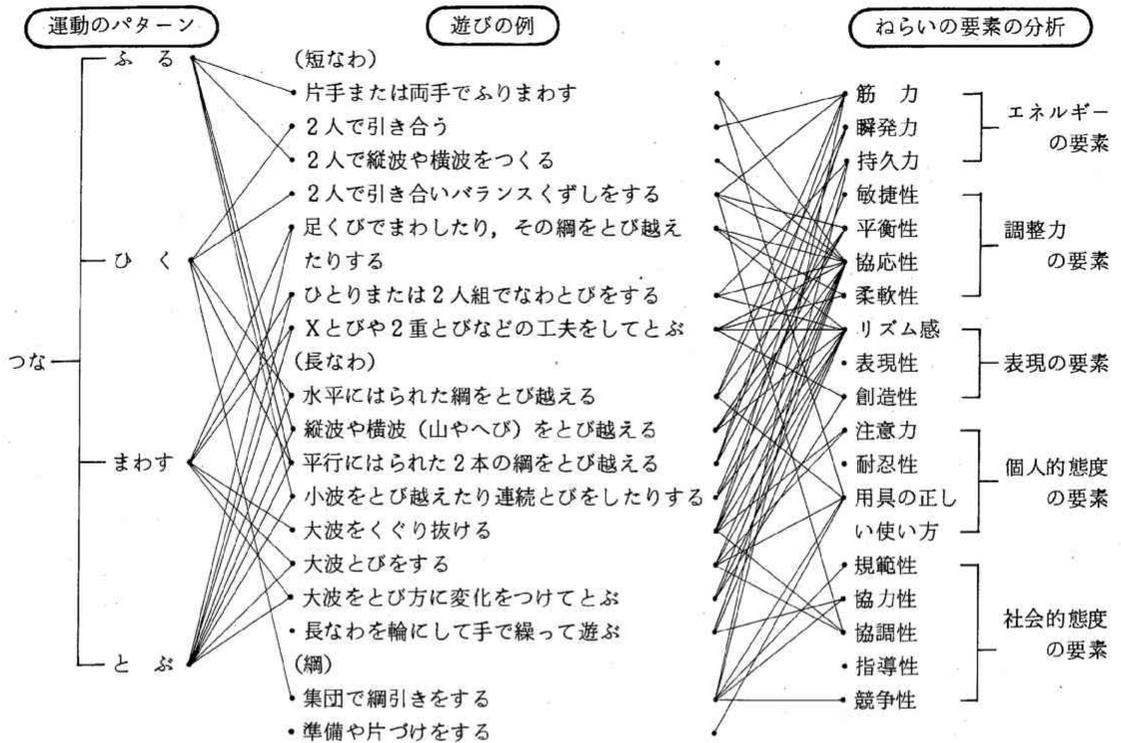
各年齢の傾向をまとめてみると、年少組では表現の要素と個人的態度にねらいの主力がおかれ、運動の要素では3または2の程度であった。年中組では運動の要素のうち平衡性と協応性に4が多く、年少組と同様に表現の要素と個人的態度にもウェイトがおかれていた。年長組になると運動の要素の調整力全般に4～5が多く、エネルギーの要素もかなり多くなっている。そして態度の要素では個人的態度よりも社会的態度にウェイトがおかれていることが明らかになり、年長組の特質があらわれている。このようにして、各年齢毎に運動遊びのねらいの要素を分析することによって、1つの運動遊びがどのようなねらいを達成するのに役立っているかがわかり、また、年齢に応じた内容を選択する必要があることを再確認した。

② 基礎的運動器具の活用方法の検討

運動器具を使っての遊びがどのような運動のパターンを含み、ねらいの要素とどのように関連するかをさぐり、教師が指導する際のめやすをつかみたいと思った。表7にその一部を抜粋したが、この表によって平均台・なわ・ボールを比較すると、平均台は調整力

表7 基礎的運動器具の検討





の要素、とくに平衡性・協応性を高め、つなとボールは比較的幅広く各要素を高めるのに役立つことがわかる。

ボール遊びの中の1つで幼児に非常に人気のあるフットベースボールを例としてあげてみよう。運動パターンは、投げる・ける・けて転がす・けり上げる・手で受ける・足でとめる・からだで受けるなどの運動がある。更にねらいの要素をみると、この運動によって敏捷性・協応性・注意力を育てるとともに、ルールを守る規範性、チームが互いに協力して友だちと調子を合わせてがんばる協力・協調性、チームリーダーはメンバーの気持を盛りたてたり、適切な指示を与えるなどの指導性、ゲームに対する意欲をもつ競争性が育てられる。このようにフットベースボールでは、主として調整力の要素と社会的態度の要素が多く達成されることがわかる。

すなわち、フットベースボールは単に運動能力を高め、身体的な発達を促すだけではなく、課題に向かって努力したり、やりとげるためにがんばったり、友だちと相談したり、相手の立場を思いやったり、教え合ったりしてルールを守ることの大切さを知り、競技の勝敗のきびしさを味わい、協力の成果を確めることなどを体験するので、広く人間形成に役立つ遊びであるといえる。

運動器具を活用しての遊びの指導に当っては、子どもたちが器具を使って自由にのびのびと楽しく遊べるようにするためには、まず教師自身が運動器具の機能や基本的な扱い方を認識することが必要である。そこで、比較的よく使われているボール・綱・マット・平均台・とび箱などについて、それぞれの準備の心得、安全な使い方、運動の仕方、運動の工夫など基本的な扱い方について検討してまとめた。その結果、各用具によってやや異なる点もあるが、全般的な指導上の留意点をあげると次のようである。

- ① 正しい扱い方を知らせる。
- ② 親しませる。
- ③ いろいろな運動の仕方を経験させる。
- ④ 不安感を感じさせないように段階的に指導する
- ⑤ 興味をもって運動ができるように工夫する。
- ⑥ ルールや遊び方を子ども同志で工夫してグループで楽しく遊びを発展させる。

目的によって器具を選択することはもちろんだが、それぞれの器具の機能を十分生かして使うようにしたい。例えばゴムボール・ドッチボール・ビーチボール・ハンドボール・サッカーボール・ビッグボールなど材質・大きさ・重さなどによってさまざまな運動の仕方を経験することができる。綱も材質・長さによってずいぶん遊びの内容が変わってくる。同じなわでも長さが40cmになると、従来のなわに対するイメージが異なり、ただ単にとぶ

だけでなく、からだをくぐらせたり、投げたり、振ったり、腰にはさんで走ったり、とり合ったり、その活用の幅は広がる。

また、いくつかの器具と組み合わせて使うと運動の要素もからみ合って一層興味深く遊べることがあるが、その場合も、各器具の機能を知り、それぞれの器具が活かされ、しかも互いに関係しながら一層その効果をあげるような組み合わせを工夫する必要がある。

### ③ 各年齢の指導の要点

調整力の発達調査、遊びの内容検討、用具の活用方法などの研究資料に基き、各年齢の指導の要点を次のようにおさえて年間指導計画作成のめやすとした。

#### a, 3歳児

- 全身を動かして遊ぶ喜びを味わわせる。  
山を登ったり、すべり台をすべったり、友だちを追いかけたり、逃げたりしながら、目と手、目と足を自分なりに協応させてバランスをとりながら楽しく遊んでいるが、ボール、フープなどの用具にも親しませ、全身を動かしつつ運動する喜びをもたせるようにした。
- 楽しく遊びながらリズムカルな動きを育てる。  
わらべ歌「あぶくたった」や「宿かえ」などをしながら合図とともに追いかけたり逃げたりするタイミングをつかませ、リズムカルに動くことを楽しませた。
- 楽しい遊具を用いながら、目と手、目と足の協応性を育てる。目標物に向かって、ボールをころがしたり、けったり、フープをまわしたり、まわっているフープをつかんだり、ブランコをこいだりしながら、目と手、目と足の協応性を身につけさせた。

#### b, 4歳児

- いろいろな運動器具や用具になじませて、基本的な扱い方を知らせる。  
三輪車、二輪車、スケーター、バランスカー、竹馬、平均台、ボール、つな、マット、とび箱などを使わせながら、それぞれの使い方を知らせ、遊びが多様に発展するように配慮した。
- 遊びのルールを守れるようにする。  
個人的な遊びから、集団遊びへと広がっていく中で、順番や交代、遊びの方法、ルールなどを守ることを知らせ、耐忍性・理解力など集団遊びの中での個人的態度を育てるように留意した。
- 自己表現の満足感をもたせる。  
平均台やマットの上で、さまざまな動物の模倣表現をしたり、ボールを思いきり遠くへけったり、目標をきめて投げ入れたりなどしながら、思いのままに自分の力を十

分出させるようにした。

c, 5歳児

- 総合的な調整力を身につける。

オリエンテーリングやサーキット遊びなどのように、敏捷性・平衡性・協応性・柔軟性・筋力・瞬発力・リズム感などが連続して要求される遊びの中で、自分のもっている力を十分に発揮させながら、自己の課題にいとませるようにした。

- 遊びの深まりや発展をうながす。

平均台での遊び、ボールを使つての遊びの工夫など、遊びをより楽しくするための創意工夫をし、互いに自分の得意な運動を発表したり、意見交換をし合つたりして、遊び方やルールを考えさせた。

- チームワークを育てる。

リーダー遊び、フットベースボール、ハンドボール遊びなどを通して、規範性・協力性・協調性・指導性・競争性などの社会的態度を身につけさせる努力をした。

2) 運動遊びの工夫・改善

子どもがその活動に興味をもち、喜んで取り組もうとする意欲をもたせるためには、子どもにとって魅力のある活動でなければならない。興味をもてる活動には意欲的で夢中になって取り組む。そして子どもがやる気を出して取り組めば活動の成果もあがり、効果的にねらいを達成することができる。ここに子どもにとって魅力のある活動にするためのゲーム化や遊びの様式の工夫が必要となる。

例えば、3歳児ではボールをけて楽しく遊べるように、自由に思いきりけつたり、かんを倒したり、ボールがうまく的に当たると動物の鳴き声ができるように工夫したり、先生といっしょに走りながら先生の持っているなわの先のボールをけるなど、興味をもたせるようにした。またかんが倒れたら次の人のためにかんを元の位置に立て直す係をきめたり、順番や交代など役割分担や約束ごとをきめたりもした。

また年少組でよく紅白の布まりをバスケットに投げ入れて遊ぶが、投げ終つたあと数をかぞえるのではなく、シーソーの原理をとり入れてたくさん玉が入つた方が下るように工夫した。赤・白にわかれて競争すると、動物の絵の貼つてあるバスケットが上つたり下つたりするようになっている。

その他のめがけてボールを力いっぱい投げる運動をさせるため、怪獣の絵を貼り、その怪獣をめがけてボールを投げ、あたると絵が回転して再び別の怪獣が表れるというしくみの「回転的あて」などを作つた。

同じように的に向つて投げる運動でも、小さい布まりを的に向つて投げつけると玉が的に

ひっついて、たくさんの当たると絵が完成されていくというピクチャーピタッチなど、器具の改善によって子ども達が喜んで遊びに参加できるように工夫した。このように子どもが喜んで遊んでいるうちに、発達に必要な能力を身につけていくようにした。

#### (4) 指導計画の作成

##### 1) ねらいの組織

- ① 運動遊びを通して人間形成をめざすことに重点をおく。
- ② 運動遊びのねらいの要素を、a 運動の要素、b 表現の要素、c 態度の要素の3点からとらえ、教育要領との関連をおさえ、系統的、段階的に組織する。
- ③ 運動能力を、技能面の向上でとらえるのではなく、子どもの能力の活用に重点をおき、総合的にとらえる。

##### 2) 活動選択の観点

- ① 運動遊びの実態調査および、実験授業を基にして、3・4・5歳児の各年齢に好まれる遊びを選ぶ。
- ② 幼児自らが意欲的に遊びにとりくめるような課題を含んだ運動遊びを選ぶ。
- ③ 1つの運動遊びが次第に発展するような順序性と系統性を考慮する。
- ④ 幼児が自分で試したり、工夫、創造したりするための資料やヒントになる遊び方や、基礎的態度や技能の指導法を考案する。

活動の選択には、各年齢に好まれる遊びでなければそのねらいを達成することは困難であろう。それにはまず興味をもたせることが大切であるが、その条件として次のような点があげられる。

- よく慣れていて安心してとりかかれる（やったことがある、見たことがある、他人がしているのを見たことがある）
- 好奇心をそそり、おもしろそうだ（ふしぎさ、おもしろさ、楽しさ）
- 友だちといっしょに遊ぶことができ、共感できる（友達関係や協力面）
- むずかしそうだが、やればできそうだ（適当な抵抗感があって意欲をそそる）
- これができれば強くなれそうだ（夢や理想の実現）
- 他人の力を借りずに、自分でやれそうだ（自立感）
- 自分で作り出したり、工夫したりできそうだ（創造の喜び）

このような幼児の興味を誘発する要素を含んだ活動を選択することが大切であろう。そのようにして選択された遊びを通して、幼児が自分で試したり、工夫・創造したりするための資料やヒントになる遊び方や、基礎的態度・技能の指導法を考案しながら活動を選択した。

#### (5) まとめ——指導上の留意点

## 1) 環境づくりの面から

- ① 発達段階に即した遊具を選択する。
- ② 遊びの導線を配慮して遊具を配置する。
- ③ 幼児数と遊具・用具の数及び空間の広さとをよく考えて準備する。
- ④ 遊具への興味づけと、正しい扱い方についての指導をしておく。
- ⑤ 環境を変えたり、刺激を与えたりして、幼児自らが遊びを創造できるような機会をつくる。
- ⑥ 遊具を媒介としての友達関係をよく観察し、必要に応じて指導・助言をする。
- ⑦ 遊具の安全性を確認する。

## 2) 指導面から

- ① 幼児自身もっている自ら伸びようとする力を育てる。

それには

- ・子供自身が自分の行動に自信をもてるようにする。
- ・成功感や喜びをもたせるために、基礎的・基本的なことから手順を教えて、子どもが自分でやってのけたり、試したりするための手がかりをつかませる。
- ・子ども自身が課題意識をもち、自発的に活動できる場面をつくる。
- ・子どもが友達の中で認められ、互いに思いやりや助け合いができるような人間関係をつくる。

このように子ども自らが内発的な要求に動かされて、能動的に活動できるように、ひとりひとりの子どもの成長発達の過程をよくみつめ、自ら伸びようとする力を育てるようにつとめる。

- ② 遊びのねらいを明確にもつ

指導に当って、教師がねらいを明確に把握していれば、そのねらいを達成するためにどのような教材・教具を選択し準備すればよいか、その指導の方法はどのような手順で行うのが効果的であるか、子どもの意見や行動にどのような助言をすればよいか明らかになる。もし教師のねらいがあいまいであれば、子どもも意欲を失い遊びも発展せず、その活動の効果もあげることができないであろう。

- ③ 興味をもてるように、遊びの様式や遊具・用具の工夫をする。

子どもは興味をもてる活動には意欲的で夢中になって取り組む。そして子どもがやる気を出して取り組めば、活動の成果も上り効果的にねらいを達成することができる。そこで子どもにとって魅力のある活動にするためにゲーム化や遊びの様式の工夫が必要となる。

- ④ 子どもの興味・関心を誘発し、より深い興味・関心に気づくように方向づける。

単なる表面的な興味ではなく、ほんとうの満足感を感じる時は、子ども自身が課題意

識をもって、その課題に立ち向って自発的に活動しているときである。子どもにとっての課題は、子ども自身が発見できるときもあり、教師や友達の示唆やヒントによって課題に気づく時もある。いずれにしても子どもにとって真の満足感が味わえるような興味づけを工夫しなければならない。

- ⑤ 個々の能力や発達の特性を尊重し、ひとりひとりに応じた指導にところがける。

その子どもの成長・発達に役立つ技術は、その子どもに合った方法を工夫して指導する必要がある。一般的な基準や評価で押しはかるだけではなく、ひとりひとりの子どもにとっての必要性を見極めて、きめの細かい指導をしたいものである。そのためには日々の観察と、その記録の検討・問題点の把握が大切に思われる。

以上、調整力を高める運動遊びの指導について研究の概略を述べたが、まだ道は遠く、運動遊びによって育てられるものは技術・技能よりもっと深く尊い人間形成への大きな力やその支えであることを知った。今回は特に調整力に焦点をあてて研究を進めたが、私達は幼児の幅広く多面的な成長発達をねがっていることは今さら見うまでもない。この研究によって指導の至難さや問題点も数多くつかめたことは幸いであった。

### 3. 個人の成長を追って

粕谷 のり子

#### (1) 個人の追跡研究の目的

運動遊びの指導に際しては、他の活動と同じ様に、幼児の個人差に応じた指導が必要であることは言うまでもない。とくに運動遊びでは子どもたち自身ができる、できないという結果を現実的にとらえられるので、その結果、自信を高めることのできる子どもがいる反面、自信を失ってしまう子どももいる。運動の技能は個人の経験の差が大きく影響するので、基礎的な技能が身につけていないために遊びに参加できなかったり、友だちとの交りがうまくいかなかったりする場合がある。教師はその子どものやりたい方法で試させたり、そのやり方の要領を教えたりして、その子どもにあった方法を工夫して指導することが必要である。そこで次のような目的をもって個人追跡をした。

- 1) 数人の幼児を抽出して、その幼児の発達の過程・興味・欲求を追跡観察し、発達の変化・特性を知り、個人指導のめやすを得る。
- 2) 個人追跡調査の結果について年齢的な発達の特性や興味・欲求の特徴を把握し、運動遊びの内容や、指導の適時性をさぐり、全体的な指導の方向を見定める。

#### (2) 研究の方法

##### 1) 対象幼児の抽出について

運動能力面だけではなく、多面的な発達をとらえて、次の観点から選ぶ。

- ① 動作は敏捷か（運動能力）
- ② 情緒は安定しているか
- ③ 言語理解や表現能力が発達しているか
- ④ 運動遊びを好むか

以上の観点についてそれぞれ、a 優れている、b 普通、c 特に指導を要するの3段階によって抽出する。

抽出幼児の人数は各クラス（6クラス）からa、b、cそれぞれ男女1名ずつ計6名、合計36名と双生児1組を抽出する。

##### 2) 研究の手続について

- ① 運動遊びへの参加状態やその変容の観察記録（略）
- ② 友達関係の観察記録とソシオメトリー

ソシオメトリーについては登園してきた子どもから全幼児に「いつも遊んでいるお友だち誰？」と質問してその名前を記録し、結果をソシオグラムであらわして考察する。実施日は、53年9月、12月、54年3月、5月、7月である。

- ③ 運動能力（調整力）についての調査

各年齢の追跡幼児（各組6名）を対象として、柔軟性（身のこなし）、協応性（目と手の協応、目と足の協応）、リズム感及び平衡性について、実態を調査する。調査日は、53年7月、54年2月である。（運動能力測定方法 参照）

### 運動能力測定方法

#### ボールの的あて

1. 目的 目と手の協応
2. 対象 3・4・5歳児の追跡幼児
3. 方法

##### [準備]

ボール 1個（直径7cm ビニール製）

的あて器具 1台（図15参照）

・的あて器具の高さ147cm 幅81cm

・的は円の直径33cm 地上から下絨までの高さ90cm

ライン 1本（的から2mの場所）

##### [手続き]

- ①指示の言葉「ボールを片手で投げて的の中へ入れましょう。いくつはいるでしょう。はいった数を数えてあげましょう」を与えて、教師は上手投げをして示範する
- ②ひとりずつラインの前に立たせる
- ③3回ボール投げを練習させる
- ④5回投げさせる

#### 4. 記録の仕方

- ①5回投げ終わったら成功回数の合計を記入する（表8参照）

表8 ボールの的あての記録表

年齢 組	3 歳		4 歳		5 歳					
	6	5	4	3	2	1				
群 性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
A										
B										
C										

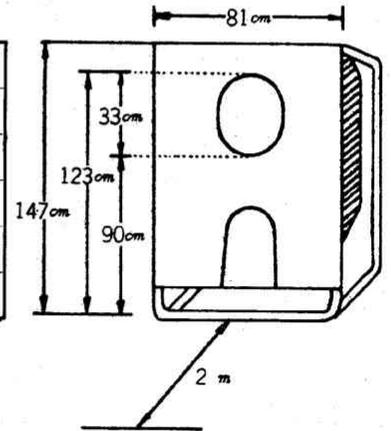


図15 ボールの的あて

#### ボールけり（動くボールをける）

1. 目的 目と足の協応
2. 対象 3・4・5歳児の追跡幼児
3. 方法

##### [準備]

サッカー用ボール 1個（直径20cm）

巧技台（枠） 6台（高さ60cmに積む）、すべり台 1台

ビーム 2本（注 ボールがまっすぐ転がり降りるように、ビームの幅を調節する）

##### 判定指標

- ・子どものける位置は、滑走面の終わりの地点0から2mの位置Aとする。

- ・位置Aから図16のように半径2mの線上にB, D……Cのマークをつける。  
角度は、 $\angle BAC=90^\circ$  ,  $\angle DAE=60^\circ$  ,  $\angle FAG=30^\circ$  とする

[手続き]

- ①ボールをけて示範する
  - ②Aの地点に立たせる
  - ③指示の言葉「転がってきたボールをまっすぐすべり台のほうに向かって、力いっぱいけり返しましょう」を与える
  - ④2回練習させる
  - ⑤ひとり5回ずつけり返させる
4. 評価の基準 (表9参照)
5. 記録の仕方
- ①各回ごとに評価の段階を記入する (表10参照)
  - ②5回の記録が終わったら、平均値 (5回分の評価の平均値) を出す

表9 評価の基準

段階	けり返す範囲
5	$30^\circ$ 以内で2m以上返る
4	$31^\circ \sim 60^\circ$
3	$61^\circ \sim 90^\circ$
2	2m以内しかとばない
1	不能 (からぶり)

表10 ボールけりの記録表

年齢 組 性別	3 歳		4 歳		5 歳								
	6		5		4		3		2		1		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
A	1												
	2												
	3												
	4												
	5												
	平均												
B	1												
	2												
	3												

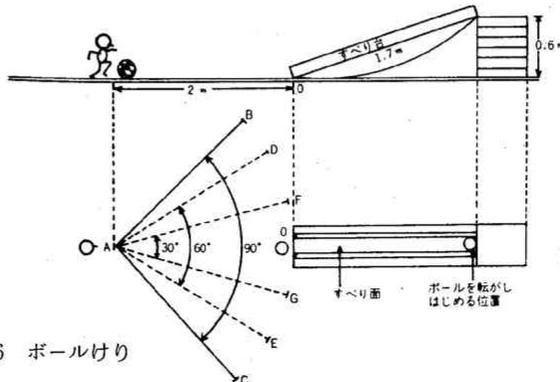


図16 ボールけり

### ケンケンパ

1. 目的 目と全身の協応とリズム感
2. 対象 3・4・5歳の追跡幼児
3. 方法

[準備]

ビニールテープ 2本 (10cm幅 11m)

[手続き]

- ①教師の示範に合わせてケンケンパをさせてリズムを把握させておく (リズム ♪♪♪ | ♪♪♪)
- ②教師が図17のコースをケンケンパをして示範する。ケンケンとは2本の線の内側に片足を、パは線の外側に両足をつく
- ③位置につかせる
- ④指示の言葉「この道をケンケンパでとんでいきましょう」を与える
- ⑤ひとりについて2度行なう

4. 評価の基準 (表11参照)

5. 記録の仕方

- ①最初1回目は練習させ、2回目の成功回数を記録する
- ②評価の段階を記入する (表12参照)

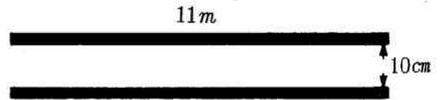


図17 ケンケンパ

表11 評価の基準

段階	状態
5	5回以上連続してできる
4	4回連続してできる
3	3回連続してできる
2	2回連続してできる
1	1回または0

表12 ケンケンパの記録表

年齢 組 性別	3歳		4歳		5歳	
	6	5	4	3	2	1
	男	女	男	女	男	女
A						
B						
C						

### かばのえさやり

1. 目的 目と手と足の協応
2. 対象 3・4・5歳の追跡幼児
3. 方法

[準備]

ふたつきごみ入れ 2個 (ふたにかばの顔をかいておく)

机 2個

かご 2個

ストップウォッチ 2個

紅白布製まり 各20個

- ・ごみ入れを向かい合わせになるように置き、両側に幼児机を置いて、その上にまりを入れたかごを置く (図18参照)

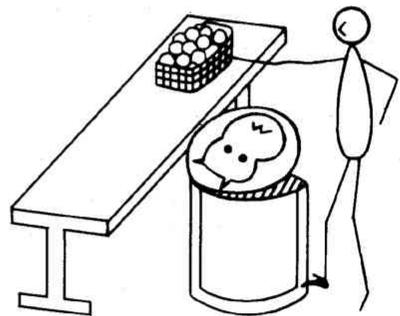


図18 かばのえさやり

[手続き]

- ①幼児をごみ入れの前に立たせ、やり方を説明しながら示範

する。説明一 「おなかをすかせたかばさんがいます。かごの中にはいっているえさを1つずつとって、足でかばさんの口をあけて、えさをやりましょう。1つあげたらすぐ口をとじ、同じようなやり方で繰返してえさやりをしましょう。なるべくたくさんやりてください」

- ②幼児を2人ずつかばの前に立たせ、3回入れ方を練習させる
- ③指示の言葉「今したようなやり方で、かばにえさやりをしましょう。合図があるまで、できるだけたくさんやりましょう」を与える
- ④20秒間投げ入れさせる

4. 記録の仕方

- ①20秒間の成功個数を幼児とともに数え、記録する
- ②2回の測定の結果を合計し、平均値を出す(表13参照)

表13  
かばのえさやりの  
記録表  
( )Gr 組氏名

回	個数
1	
2	
平均	

とび越しくぐり

- 1. 目的 全身の協応
- 2. 対象 3・4・5歳の追跡幼児
- 3. 方法

[準備]

- 幼児用長いす 2個
- ストップウォッチ 2個
- ゴムテープ 1本
  - ・テープの高さ 5歳児35cm 4歳児33cm 3歳児30cm(図19参照)

[手続き]

- ①とび越しくぐりの方法を説明しながら、教師2人で示範する。説明一 「2人ずつゴムテープの横に立ち、”用意、ドン、”の合図でゴムをとび越しくぐりましょう。この動きを3回して、どのくらい速くできるかはわかります。とび越すのは片足ふみ切りでも、両足ふみ切りでもよい。くぐるときは手でテープをもち上げてはいけません」
- ②幼児を2人ずつゴムテープの横に立たせて、1度練習させ、とび越し方、くぐり方について助言する
- ③指示の言葉「今したように2人でとび越しくぐり競争をしましょう。どのくらい速くできるかはかってあげましょうね」を与える
- ④練習にひき続いて2回行なわせる
- ⑤動作の完全に終了したときの時間を測定する。ただし、大きくひっかかったり、あきらかにまたいだ場合はやりなおす

4. 記録の仕方

- ①各回ごとに所要時間を記録表(表14)に記録する
- ②2回の測定の結果を合計し、平均値を出す

表14  
とび越しくぐりの  
記録表  
( )Gr 組氏名

回	所要時間(秒)
1	
2	
平均	

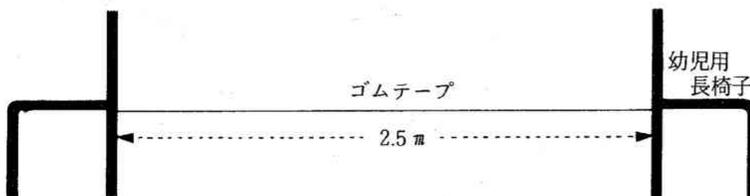


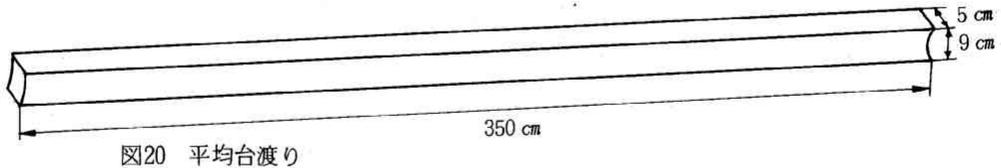
図19 とび越しくぐり

## 平均台渡り

1. 目的 平衡性
2. 対象 3・4・5歳の追跡幼児
3. 方法

[準備]

平均台のバー 2本（幅5cm，高さ9cm）を直接床の上におく（図20参照）



[手続き]

- ①平均台のバーの横に幼児を並ばせ、前を向いて落ちないようにはしまで渡るよう説明しながら示範する
  - ②幼児をひとりずつバーのはしに立たせる
  - ③1度練習させ、落ちないようにバランスをとりながら前を向いて渡るよう助言する
  - ④指示の言葉「この棒の上を前向きで落ちないように、向こうのはしまで渡りましょう。急がなくてもいいのですよ。落ちないように気をつけて渡りましょう」を与え、順番に渡らせる
  - ⑤2度行なわせて評価する
4. 評価の基準（表15参照）
  5. 記録の仕方
    - ①各回ごとに段階を評価表に記録する（表16参照）
    - ②2回の測定の結果を合計し、平均値を出す

表15 評価の基準

段階	状 態
5	落ちないで安定して渡れる
4	ぐらぐらするが落ちずに渡れる
3	1～2回落ちるが、渡れる
2	途中で何回か落ちるが、渡れる
1	横を向かないと渡れない

表16 評価表  
( )Gr 組氏名

試行回	評 価
1	
2	
平均	

- ④ 幼児・児童性格診断検査（高木俊一郎，坂本竜生共著）

幼児社会性発達検査（教研式）

53年11月実施。母親に回答を依頼する。

### (3) 事例

“運動遊びが契機となって、多面的に育ったK君”

(3年保育 年中組 S48年8月生)

1) K君のプロフィール

父、母、姉の4人家族で、小学校5年生の姉がK君を自分のマスコットのようにかわいがり、面倒をみていた。入園前の遊びもままごと遊びやお母さんごっこなど、姉を相手とした遊びが多く、戸外へは遊びに出ない状態であった。

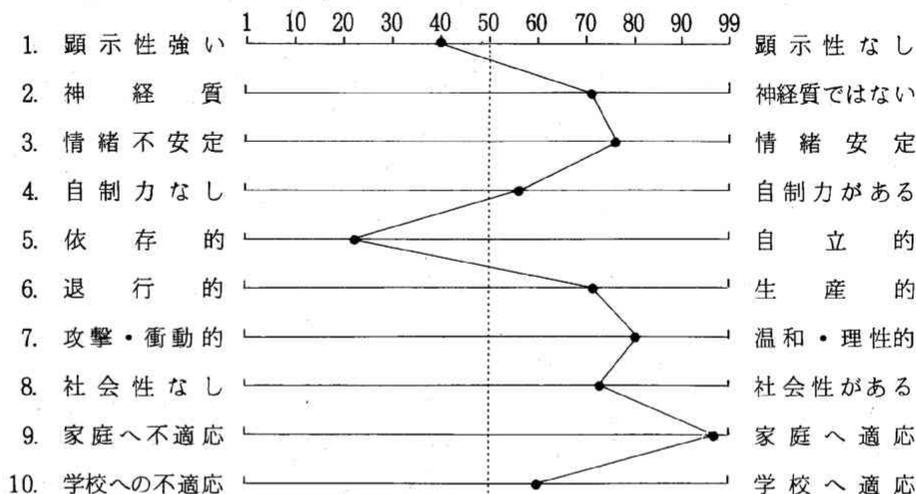


図21 K君の性格診断検査のプロフィール

図21の性格診断検査の結果をみると、非常に依存的であり、顕示性が強く、他の項に比べて自制力がやや弱い傾向である。家庭への適応はよいが、それに比べて集団生活への適応はやや低くなっている。性格は明るく温和で、のんびりしている。

2) 入園当初の姿

情緒不安定で友達の遊びを遠くから見ているか、ひとり遊びをすることが多く、友達に遊具をとられたり、ふたれたりしても全然抵抗せず、されるに任せていてそのあと、せきをきったように大声で泣き出す。K君にとって泣くことは精一ぱいの抗議であり、教師に応援を求める合図でもあった。戸外遊びも活発でなく、他の表現活動にも消極的であり、身のこなしもぎこちなく全般に敏捷性に欠けていた。

3) 家庭との連絡

家庭との連絡を十分にとり、K君の自立性をうながすことに協力してもらった。

- ①自分の身のまわりのことは自分でさせ、依頼心をすて自立するように励ますこと。
- ②隣近所の友だちとよく遊ばせ、遊びの場を屋内から屋外へうつすように仕向けること。

4) 園での指導とK君の変容

- ①戸外遊びへの誘導

年中組当初から「あわぶくたつた」「おしゃれなおおかみさん」などの鬼遊びに参加させ、友達とふれあう機会をつくる。またボールやバランスボードなどの運動用具を使って機敏に動けるように仕向けた。

② プール遊びでの自信

年中組7月のプール遊びでは、元気に水中にもぐって石を拾ったり、水面に浮いたり、ビート板でばた足前進ができたりして、クラスの注目をあびた。これがK君を得意がらせ、自信をもたせた大きな要因のひとつになった。この頃から家庭でも自分で進んで身のまわりの始末ができるようになり、近所の子どもたちと遊べるようになった。

③ 交友関係のひろがり

行動が活発になるとともに、交友関係も徐々に広がった。クラスの友達がK君と遊びたがり、図22のソシオグラムにあらわれたように大勢の友達から好意をもたれてきた。

④ 運動能力の発達

図23のように調査1回目では、はずかしくもじもじしてあまりよい結果はでなかったが、2回目の調査では積極的に参加し、目と手、足の協応をねらった「かばのえさやり」目と足の協応をねらった「ボールけり」などが上昇している。

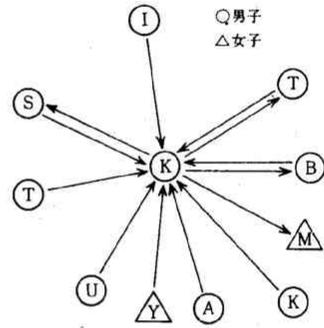


図22 K君のソシオグラム

⑤ 5歳児になって

自発的に行動できるようになり、何事にも積極的に参加するようになった。特に「フットベースボール」や「ハンドボール遊び」などでは、チームをよくもりたてて協力して遊べるようにみんなを励ますなど、チームの推進力となっている。無理に自分の意見を押しつけることなく、友達の見解も受け入れながらみんなが楽しく遊べるようなアイデアを提供するので友達にも好感をもたれている。3歳児の時、自己主張ができず、泣いて訴えることしかできなかったK君の成長ぶりはめざましいものである。

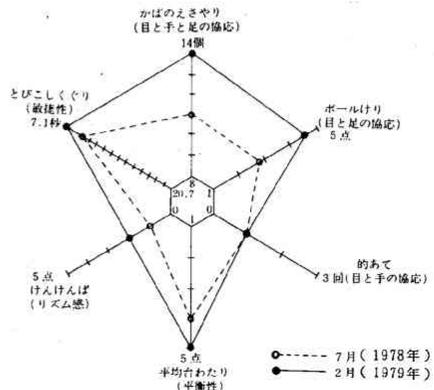


図23 K君の運動能力の変化



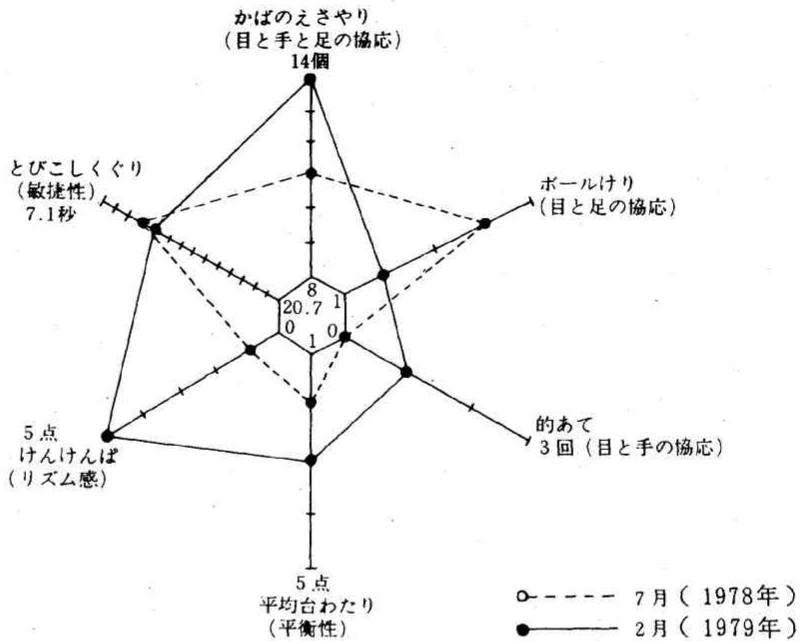


図 25 E子の運動能力の変化

### 3) 5歳児になって

仲よし友達もでき、非常に安定するとともに、全体の話し合いで自分の思ったことをみんなの前で話したり、グループ相談の場で自分の希望を言ったりするなどの積極性もみられるようになった。4歳ではひとりで遊んでいることが多かったのが、現在では集団の中で、チームのために自分の力を発揮しようとする気持もみられるようになってきた。

#### “運動が得意で友だちに認められるK子ちゃん”

一言葉がけができないために友達ができない

(3年保育 年少組 S49年6月生)

#### 1) K子のプロフィール

父、母、兄(小学校2年生)、祖母の5人家族。兄は本が好きで本の世界にこもり、母親は洋裁をしてその仕事に打ちこむなど、家族のもの全員がそれぞれ自分の城にとじこもっていてK子との対話は少ないようである。

温和な性格であり、社会性発達検査では自立性、運動、生活習慣など上位を示しているが、言語とくに意志伝達と表現法が低い結果を示している。

#### 2) 園での様子

①身のまわりの始末はきちんとできる。

②言語表現が少ない。

「お早よう」という朝の挨拶のことばも中々でてこない。また、教師からの「K子ちゃん、誰ときたの?」「おうちで何してたの」という簡単な問いかけに対しても言葉はでてこないののである。

③ひとり遊びが多い

室内ではパズルや玉通しをしたり、絵本室へ行って絵本を見ることが多い。また、友達遊ぶ様子を遠くからながめていることが多く、教師の誘いかけで友達の遊びの中に誘ってみても、その場から教師がいなくなるとひとり遊びへもどることが多い。

④運動遊びが得意

入園当初、3歳児達が園庭で自由に遊んでいる状態をみると、ほとんど砂場や、教師にこいでもらう箱ぶらんこに興味集中するが、K子はいつも1人乗りのぶらんこに乗り、立って元気よくこいでいる。ぶらんこの動きやリズムを心から楽しんでいるようで、室内では見られない明るい活気のある表情が見られるのである。4、5歳児用の園庭で遊ぶときもほとんどの子どもは、三輪車、手押車、砂場、すべり台などに興味を示すが、K子は鉄棒、クライムジム、うんていなどの遊具を使って年長児と同じような運動をして楽しんで遊ぶ様子が見られる。

運動能力調査でも表17のように追跡幼児12名の中でも上位を占めている。

図26の運動調査結果からみても1回目から2回目へと上昇している様子がうかがえる。

表17 運動能力調査54年2月

3歳児追跡幼児、男児6名、女児6名それぞれの平均値とK子の得点(○印)

測定項目 対象	ボールけり(点)		ケンケンパー(点)		とび越しくぐり(秒)		かばのえさやり(筒)	
	男	女	男	女	男	女	男	女
追跡 幼児 12 名	4	④	5	⑤	9.8	10.35	2.5	⑫
	4	4	3	5	9.9	⑩.6	9	11
	4	3	2	5	11.6	11.3	9	10
	2	3	1	2	12.0	11.65	9	9
	2	2	1	1	13.8	12.05	8	9
	2	2	1	0	11.2	12.05	7	9

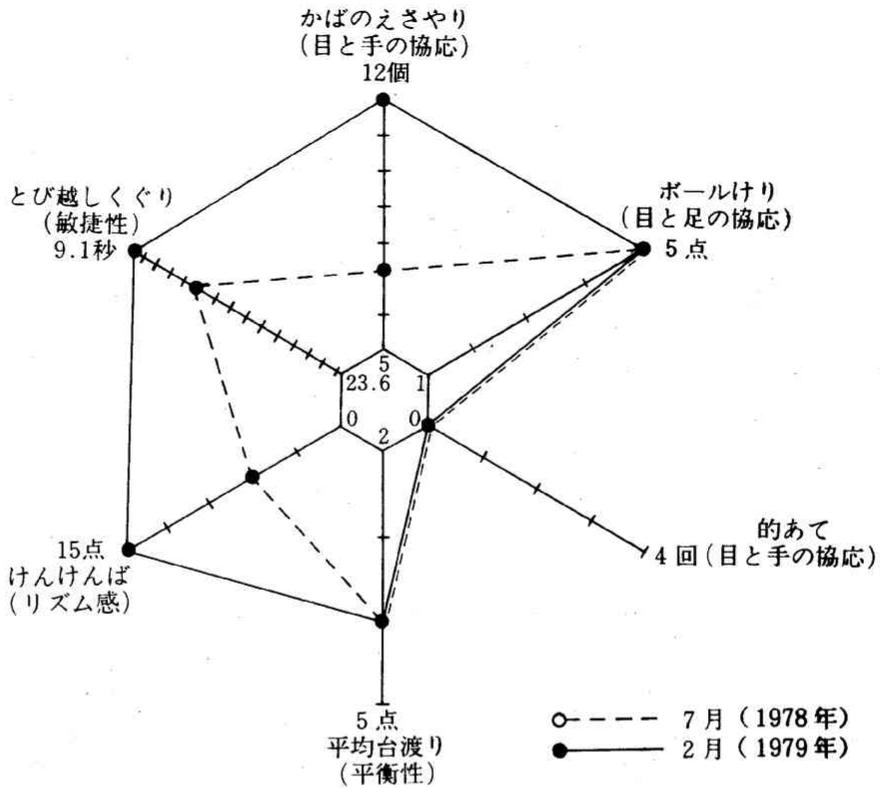


図26 K子の運動能力の変化

### 3) K子の変容

#### ①友達との交流

ひとり遊びをしたり、傍観したりしているK子。そのK子の存在には同じクラスの子どもたちは誰も気づいていない様子であった。しかしK子には「いつもいっしょに遊びたい」という友達があった。それは、ソシオグラム図27、53年9月、53年12月にあらわれているように組の多くの友達から親しまれているA子であるが、あくまで一方的な思いであった。しかし、2学期から3学期頃になるとK子の得意な運動遊びがみんなの注目をあつめるようになった。特に運動好きで活発なB子が鉄棒で「前まわり」をするK子を見て仲間に加わり、K子は運動遊びの中で遊び仲間を得ることができた。ソシオグラム図27、54年3月ではK子からB子への働きかけが見られた。表18の事例でわかるようにB子がK子に鉄棒での中ぬき、うんでいでの1本ぬき渡りの方法を教えてもらっている様子から、2人の交流がみられるのである。

ソシオグラム図27、54年5月ではG子とお互いに親しんで交る様子がうかがえる。また、54年7月には更にE子からも親しまれるようになり、友達のなかったK子も今ではすっかり気持ちのあった友達ができ、楽しく安定した表情がみられるようになった。

○ 男児  
△ 女児

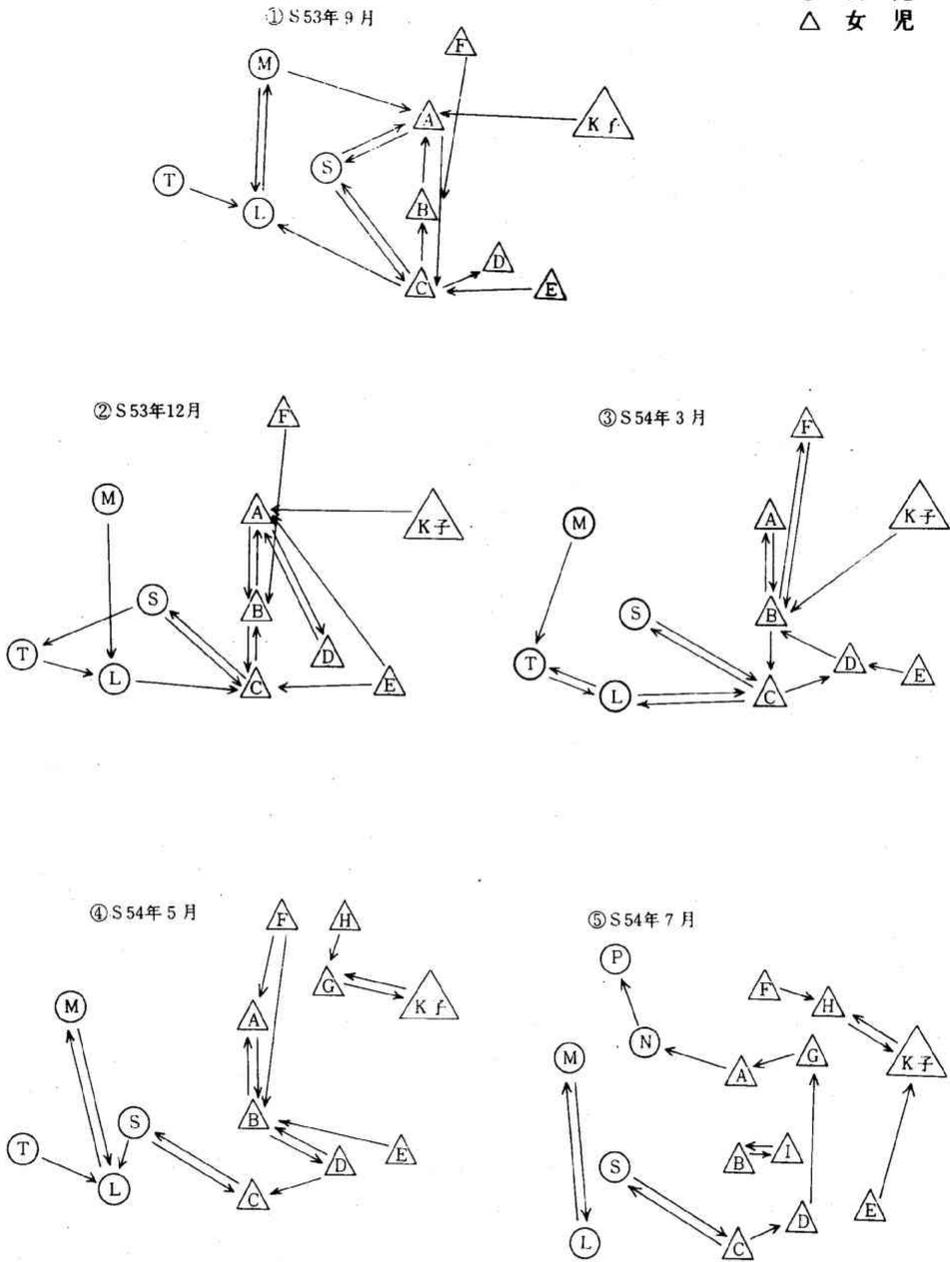


図 27 K子のソシオグラムの変容

表18 K子の遊びの具体事例

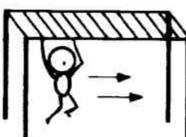
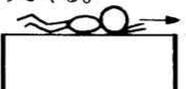
1. 鉄棒で遊ぶ

2月26日(月) 10時40分～11時10分

行 動 の 記 録	備 考
<p>・全員で5歳児園庭へいく。砂場・すべり台・三輪車・押し車・ぶらんこなどの遊びに分かれる。K子は低鉄棒へいく。</p> <p>T「K子ちゃん、鉄棒できるの？」</p> <p>Ⓚ「デキルヨ」と大きな声でいう。鉄棒を両手でもち、とび上がって腹で支えて、前回転をする。</p>  <p>T「うわー、K子ちゃんすごいね」</p> <p>・砂場にいたNちゃんが近寄ってくる。</p> <p>N「ワタシモ、デキルヨ」Nも前回転をする。</p>  <p>N「ホラネ」</p> <p>K子とNの2人がしばらく前回転を交互にし合って遊ぶ。</p> <p>Ⓚ「コレモデキルヨ」</p> <p>N「ナニ、デキルノ？」</p> <p>・K子は鉄棒に片足をかけ、続いてもう片足をかけて、尻からくりとまわり抜ける。</p>  <p>NはK子の動きをまねて、K子の通りにしようと思うが、なかなかできない。</p> <p>N「K子ちゃん、ドウスルノ？」</p> <p>Ⓚ「コウスルネン」といいながら、K子は同じ動作を何回もやってみせる。Nはついにできない。</p> <p>N「K子ちゃん ジョウズネ」</p> <p>・K子はとてもうれしそうな表情。隣にあるジャングルジムへいく。NもK子についていき、ジャングルジムで登ったり、降りたりして遊ぶ。</p>	<p>・教師に認められたK子は、得意になって鉄棒遊びをする</p> <p>・運動好きで活発なNが、鉄棒遊びを楽しんでいるK子を見て、仲間に加わり、K子は遊び仲間を得ることができた。</p> <p>・簡単ではあるが、K子からの話しかけの言葉も見られるようになる</p> <p>・K子はNが認めてくれてうれしくなり、一生懸命Nに遊びの仕方を教える</p> <p>・K子の通りにできないNは、K子の巧みに感心して後、2人の交流が続けられた</p>

2. うんていで遊ぶ

3月9日(金) 11時15分～11時40分

行 動 の 記 録	備 考
<p>・K子はNとうんていで遊ぶ。1本抜き(棒を1本ずつ抜かして前進する遊び)をはじめると、Nは途中で力がつきて落ちる。</p> <p>N「K子ちゃん、デキルカ？」</p> <p>Ⓚ「ウン、デキルヨ」と返事をしてうんていの端から端まで、1本抜きをやり通す。</p>  <p>N「マタ、シヨウ」 K子ができるのでNはがんばってするが、なかなかできない。</p> <p>Y子・A子「ワタシモ、イレテ」と寄ってくる。</p> <p>Ⓚ「コンナノモ デキル？」といって、うんていの上をはう。</p> 	<p>・鉄棒ですっかり仲よしになったNと遊ぶ</p> <p>・K子は持久力が強いのか、1本抜きをしながら端から端までいくことができる</p> <p>・他の3歳児は途中で落ちてしまう</p> <p>・K子は新しい遊びを言葉で紹介する</p>

<p>・まわりにいた男児，K君，O君も寄ってきて，仲間にはいる。うんていの片方からはってきたK君と出会う。</p> <p>④「ソコ ドケテ Kクン」 K君はそのまま逆もどりする。K子はそのまま端まではっていく。</p>	<p>・おとなしいK子も運動遊びでは男の子にもゆずらない元気な活発なところがみられる</p>
---	--

## ②ことばの発達

言語での表現がみられなかったK子も運動遊びを楽しみ，その場で友だちといっしょに交流することによって会話が芽生えてきた。表18の事例にあるように鉄棒の中ぬきの仕方を「コウスルネン」と説明したり，「コンナノモデキルヨ」とうんていの遊びを紹介したりしている。「お早よう」の挨拶もするようになった。また，「ワタシノオニイチャン，3ネン5クミヤデ」「オニイチャンモ サカアガリデキルヨ」「オカアサン シンドイノ。オバアチャンニオクッテキテモラッタ」など家での様子も進んで話すようになってきた。

描いた絵についても3歳ではほとんど話をしなかったK子は4歳になって「ユウエンチノ ゼットコースター」「オカアサン ナワトビシテル」「ブドウノスキナ オトウサン」「ウマ オサンボシテルノ オキヤクサンノトコロマデイクノ ノセテアゲルノヨ」などとかいた絵についてある程度説明を加えて話をするようになった。

また，異年齢混合保育では年長児には勿論話しかけることのできななかったK子が6月には，玉通しの玉を集めて「宝石屋」ごっこを始めた。年長児に対して「ドレニ シマショウカ?」「オカネ モッテキテクダサイ」「マルイノ コッチニアリマスヨ」ときそいかけの言葉やさいそく，指示のことばがでる位に成長してきた。

## (4) 追跡研究結果からのまとめ

以上，三つの事例からでもわかるように「ひとりぼっち」「消極的であった」「言葉がでてこなかった」「依存的，依頼心が強い」「社会性発達が未熟」「情緒不安定」など，のびのびと集団生活に参加できなかった子どもたちが運動遊びが契機になって他から認められ，自信をもち，意欲的になり，心が解放されて活発な行動をとるようになり，友達との交流の輪がひろがり，他活動にも積極的に参加するようになった。そうして社会性や知的なのびがみられるようになり，子どもの生活を豊かにしていった。

このようなことから表19に示すように運動遊びを通して円満な人間形成，全人的成長，発達を促すことができたことは幸いであった。この追跡研究によって，発達のしかたも興味もひとりひとりの子どもがそれぞれ特徴をもつので，その特性をよく見極めて指導する必要があることを確認することができ，また，ひとりの子どもを追跡することによって得た情報を全体的な指導に役立てて基礎的技能，態度の育成についての指導の資料を得ることができた。

表19 追跡研究結果

